

令和7年度（第64回）農林水産祭
第40回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」
【森林サービス産業の推進による都市近郊での新たな林業経営】

—業績発表及びディスカッションの内容—

開催日時	令和7年6月5日（木）13時30分～16時00分
場所	東京都中央区 紙パルプ会館 2階 フェニックスホール
主催	農林水産省 ・ 公益財団法人 日本農林漁業振興会



令和7年9月
公益財団法人 日本農林漁業振興会

発行にあたって

農林水産祭事業は、農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞された方の中から特に優秀な農林水産業者を選び、その業績を顕彰し、業績内容について広く普及を図ることを目的の一つとしています。

このシンポジウムは、農林水産祭事業の一環として、去る令和7年6月5日（木）東京都中央区の紙パルプ会館において『森林サービス産業の推進による都市近郊での新たな林業経営』をテーマに、平成6年度農林水産祭林産部門の天皇杯受賞者である株式会社T-FORESTRYの業績を取り上げて、約70名の参加者の下、開催しました。（オンラインでの配信も併せて行い40名を超える方にご視聴頂きました。）

本書は、「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の業績発表、意見交換（ディスカッション）等の内容を一冊に取りまとめたものであり、これらの内容が普及し活用されて、今後の我が国農林水産業の振興発展に寄与することを願うものです。

最後に、今回開催にあたり、多大なるご支援とご協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

令和7年9月

公益財団法人 日本農林漁業振興会

令和7年度（第64回）農林水産祭
（第40回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

目 次

シンポジウムスケジュール・・・・・・・・・・	1
シンポジウム出席者・・・・・・・・・・	2
受賞者の業績概要・・・・・・・・・・	3
シンポジウムの記録・・・・・・・・・・	4

令和7年度（第64回）農林水産祭

「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」（トップリーダー発表会）

【森林サービス産業の推進による都市近郊での新たな林業経営】

《スケジュール》

13:30～16:00

（敬称略）

- 1 開 会（13:30）
公益財団法人 日本農林漁業振興会 常務理事 小栗 邦夫
- 2 挨拶 農林水産省大臣農林水産技術会議事務局研究推進課
技術政策情報分析官 島津 久樹
- 3 選賞審査報告 農林水産祭中央審査委員会林産分科会主査 田中 浩
（公益財団法人 国際緑化推進センター 技術顧問）
- 4 業績発表 令和7年度林産部門天皇杯受賞
株式会社T-FORESTRY代表取締役 辻村 百樹
- ・・・休憩（14:30～14:40）・・・

- 5 ディスカッション（14:40）
（登壇者）
 - ・コーディネーター
田中 浩（3に同じ）
 - ・業績発表者
辻村 百樹（4に同じ）
 - ・コメンテーター
葛城 奈海（農林水産祭中央審査委員会林産分科会委員（ジャーナリスト））
平野 悠一郎（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所
多摩森林科学園主任研究員）
鈴木 毅人（株式会社T-FORESTRY統括マネージャー）
豊永 洋子（神奈川県県西地域県政総合センター森林部森林保全課副技幹）

- （内容）
- ・意見交換、質疑応答
 - ・総括

- 6 閉 会（16:00）

第40回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」出席者

R7. 6. 5（敬称略）

区 分	氏 名	所 属 ・ 職 名 等
業績発表者	辻村 百樹	令和6年農林水産祭林産経営部門天皇杯受賞 株式会社T－FORESTRY 代表取締役
コーディネーター 及び選賞審査報告	田中 浩	農林水産祭中央審査委員会林産分科会主査 （公益財団法人国際緑化推進センター技術顧問）
コメンテーター	葛城 奈海	農林水産祭中央審査委員会林産分科会委員 （ジャーナリスト）
コメンテーター	平野 悠一郎	国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所 多摩森林科学園主任研究員
コメンテーター	鈴木 毅人	株式会社T－FORESTRY統括マネージャー
コメンテーター	豊永 洋子	神奈川県県西地域県政総合センター 森林部森林保全課副技幹
挨 拶	島津 久樹	農林水産省農林水産技術会議事務局研究推進課 技術政策情報分析官
司会・進行	小栗 邦夫	（公財）日本農林漁業振興会 常務理事

林産部門

出品財 経営（林業経営）

株式会社 T-FORESTRY
（代表 辻村 百樹）

神奈川県小田原市



1 地域の概要

小田原市は、神奈川県の南西部に位置し、市域の38%が森林で、うちスギ、ヒノキ等の人工林が68%を占めている。同社が運営する森林空間活用サービス施設は、東京から車で1時間30分ほどでアクセスができ、観光地の箱根に隣接している。周辺には、市の施設である「小田原市いこいの森」や「こどもの森公園わんぱくらんど」等があり、一帯は「ODAWARA FOREST BASE」と称され、同市は林野庁の「森林サービス産業推進地域」に登録されている。

2 受賞者の取組の経過と経営の現況

同社は、代表の辻村氏が所有する森林をレクリエーションのための活動空間として活用するサービスを開始するために平成22年2月に設立された。

当該森林は、江戸時代に商家であった辻村氏の祖先が、小田原藩に金銭面で貢献した功績により与えられた藩有林の永代管理権を承継したものである。現在、13 齢級以上のスギ、ヒノキの人工林が主体であり、中には林齢300年を超える巨木もある。

伐採後の植林、保育による支出を考慮すると現時点では収益が見込み難いことから、一時的に主伐を休止し、間伐のみ行っている。そのような中、森林空間を活用して新たなサービスを提供することを発案し、平成22年4月に「フォレストアドベンチャー」事業がスタートした。

3 受賞財の特色

＜高齢級の森林を活用した森林サービスを展開＞

フォレストアドベンチャーは、地上から高さ10～22mの木々の間に張られたワイヤーをジップスライド（空中滑空）や樹間歩行をしながら約1haの森林内を巡ることができる施設である。さらに、平成30年からは、2.5haの森林内で既設の作業道を活用したマウンテンバイク用のコースを10種類、総延長2.5kmを整備し、「フォレストバイク」事業も開始するなど、森林空間を活用したサービスを展開している。今では年間約2万人が訪れる人気スポットとして集客に成功している。

4 普及性と今後の発展方向

同社は、令和6年3月にフォレストアドベンチャーのリニューアルを行うなどリピート客を飽きさせない工夫を重ねるとともに、利用者の安全確保のための枯損木や危険な枝の除去等の森林管理を日々行っている。

同施設は立木をそのままの状態で活用しており、同社は、育林作業を継続しながら、木材販売による収入が少ない中でも森林空間を活用して収入を確保することによって、林業経営の持続性を高める先進事例を提示し、高齢級の森林資源と立地状況に適応した経営により、代々育んできた森林を後世に引き継ぐ取組を進めている。

【開会】公益財団法人日本農林漁業振興会 常務理事 小栗 邦夫

敬称略（以下同じ）

只今から「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」を開催いたします。

私は、農林水産祭の事務局を務めております日本農林漁業振興会、常務理事の小栗でございます。皆様にはご多忙中のところ、参加していただきまして誠にありがとうございます。また、本日は、オンラインで、一方通行でございますが、ご視聴いただけるように設定しております。よろしくお願いをいたします。

本日のシンポジウムは、農林水産祭で表彰されました優秀事例の成果を関係者の皆様に広くお伝えすることにより、今後の農林水産業の発展の一助になればと例年開催しているものでございます。農林水産祭は昭和37年に始まり、今年度で64回目を迎える伝統ある行事でございますが、このうち、表彰事業は、現在、7部門に分かれておりまして、過去1年間の各種のコンクールで農林水産大臣賞を受賞された方々の中から厳正な審査を経て、天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会長賞のいわゆる三賞が授与されることになっております。昨年、林産部門で天皇杯を受賞されました神奈川県株式会社TFORESTRYの代表、辻村百樹様に本日はお越しいただいております。改めてお話を伺い、また、学識経験者の方々と意見交換をお願いしたものでございまして、天皇杯受賞後、ますますお忙しくなれたと思いますが、快くお引き受けいただきました。改めましてお祝いと御礼を申し上げる次第でございます。

それでは、本日は、農林水産省からは農林水産技術会議の島津情報分析官に参加いただいております。農林水産省を代表してご挨拶をお願いいたします。

【挨拶】農林水産省農林水産技術会議事務局研究推進課

技術政策情報分析官 島津 久樹

ご紹介いただきました農林水産省の島津でございます。本日の農林水産祭「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の開催に当たり一言ご挨拶申し上げます。

本日はお忙しい中、かように多数の皆様にご参加いただき誠にありがとうございます。また、この場をお借りしまして、辻村様を初めとします株式会社TFORESTRYの皆様にご改めまして祝意を申し上げます。受賞が決まってから半年以上が経過し、幾多の方々から何度となく祝意は寄せられているのではないかとと思いますが、改めて申し上

げます。このたびの天皇杯受賞、誠におめでとうございます。

受賞された天皇杯の重みは、先ほど小栗常務からも言及がございましたので、私からはあえて繰り返しません。大変重みがあり、名誉ある受賞とご認識いただいているかと思っています。

農林水産祭でございますが、T－FORESTRY様を初め優秀な農林水産業者を表彰するのみならず、せつかくの立派なご業績を国内の数多の農林水産漁業者にもきちんと知っていただいて、自らの経営の範としていただけるような周知を目的の一つとしております。本日のシンポジウムも、その目的にかなうということで振興会に開催していただいております。

今回、ご業績を発表していただきます株式会社T－FORESTRY様は、小田原において、13年齢級以上のスギ、ヒノキの人工林などの森林資源、さらには都市部にも観光地にもアクセスがよいという地の利を生かし、森林をレクリエーションのための活動空間として活用したサービスを実践しておられます。私事ですが、私の娘はフォレストアドベンチャーが好きなので、受賞が決まった際、小田原にある施設を承知しているか尋ねたところ、一、二年前に友人で行ったと即答されまして、やはり首都圏に近いということは、アクセスする人が非常に多くいるものなのだなと、改めて認識した次第です。

本日、ご参加いただいている皆様は、何かしらの形で林業、森林に携わる方かと思えます。そういった方々にとってみれば、釈迦に説法かと思いますが、森林資源は人の世代を超える育成期間が必要でございます。その多くは先人から連綿と引き継がれた宝でございます。ただ、林業経営も必ずしも順風満帆ではない、非常に厳しい面もある中、多くの林業経営者が先祖から受け継いできた山や森をいかに維持し、子孫に引き継いでいけるか、それを日夜、本当に考えておられます。そのような中でT－FORESTRY様の取組は、林業経営を経済的に維持していく、持続させていく新しい手法として関係者から大変注目されていると伺っております。現地調査に、本日ご出席の委員の皆様を含めまして何人か行かれたわけですが、帰ってきて報告をいただく委員会の場で、T－FORESTRY様の現地は圧巻だったと、非常に感嘆しておられたのが記憶に残っております。

本日は、審査委員を感嘆させたすばらしいご業績について直接お話を伺えるという貴重な機会でございます。報告書もちろん出てはいますが、それを読んだだけではわからないことも多々あるかと思っておりますので、そういったことに対するご質問、それから業績に対するさまざまな角度からの意見交換、これができるのは、本日対面でこの場に参加され

た皆様方だけに許されたことでございますので、こういった非常に貴重な機会をぜひご活用いただければと思っております。

終わりに、本日のシンポジウムが関係者の皆様、出席の皆様の今後のご活躍の一助となることをご期待申し上げまして、私からの挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。(拍手)

○司会 ありがとうございます。これから議事に入ります。まず、最初は選賞審査報告でございます。中央審査委員会、林産分科会の主査を務めていただきました国際緑化推進センターの田中技術顧問にお願いをいたします。

【選賞審査報告】農林水産祭中央審査委員会林産分科会主査 田中 浩
(公益財団法人国際緑化推進センター技術顧問)

皆さん、こんにちは。ご紹介にあずかりました農林水産祭の中央審査委員会の林産分科会の主査を務めています田中浩と申します。調査にお伺いして感嘆させられた一人でございます。審査に当たってどのような経緯で審査が行われたか、どんな内容の審査だったかに関して、簡単にご報告をしたいと思います。

先ほど小栗さんからご紹介のありました「農林水産祭とは」ということでスライドに書かれています、昭和37年から国民的な祭典として実施している顕彰制度です。平成6年度、辻村さん、T-FORESTRYが受賞されたのは63回目に当たるということです。

農林水産祭とは

国民の農林水産業と食に対する認識を深めるとともに、農林水産業者の技術改善及び経営発展の意欲を高めるため、農林水産省と（公財）日本農林漁業振興会の共催により、昭和37年から国民的な祭典として実施している顕彰制度で、令和6年度は63回目、本年度は64回目

★ 農林水産祭選賞部門

- ① 農産・蚕糸 ② 園芸 ③ 畜産
④ 林産 ⑤ 水産 ⑥ 多角化経営
⑦ むらづくり *女性の活躍

★ 選賞区分

天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞

* 女性の活躍については内閣総理大臣賞と日本農林漁業振興会会長賞

* 天皇杯を賜る顕彰はスポーツ関係以外では農林水産祭のみ

農林水産祭の選賞部門というのは、ここに書かれたように七つの分野になっています。農産・蚕糸、園芸、畜産、そして林産、水産、多角化経営、むらづくり。また新たに女性の活躍というような部門も設けられています。選賞区分としてはここに書かれた天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞ということで、今回、T-FORESTRYはトップに当たる栄えある天皇杯を受賞されたということになります。天皇杯という名前がついた顕彰というのは、私はサッカーをやっている人間なので、毎年、お正月に天皇杯の

決勝戦があるということで、知っていたのですが、実はこういうスポーツ関係以外ではこの農林水産祭のみということで、非常に栄えある賞であるということでもあります。

平成6年度の審査ですが、林産部門の選賞審査対象は、令和6年度の農林水産祭参加行事での農林水産大臣賞受賞者のみです。どの対象者も何らかの形で農林水産大臣賞を受賞されたということで、大変すばらしい活動をされている方々が対象となっているということです。6年

令和6年度林産部門の選賞審査対象

★ 対象者：令和6年度農林水産祭参加行事での
農林水産大臣賞受賞者

★ 対象出品財数：47点（参加行事数 23行事）

【出品財別内訳】

- ・経営（林業経営）8点
- ・技術、ほ場（苗ほ等）7点
- ・産物（木材、きのこ、木炭等）32点

度に関しては、この対象の出品財というのが47点でした。参加行事数は23行事ですので、一つの行事の中で幾つかの候補が出てきている例もあるということになります。出品財の中の内訳というのを見ますと、経営部門、林業経営が8点、それから技術、ほ場（苗ほ等）ですが、これが7点、そして産物（木材、きのこ、木炭等）が32点という内容でした。

選賞の審査の上で考慮する点がここに書かれた五つになります。すでに参加行事において受賞されているので、それぞれの行事において求められている審査基準に加えて、ここに書かれた五つをこの審査では重視しています。まず第1に「出品財の性質・内容が抜群で、広く社会

選賞審査の上で考慮する点

農林水産祭参加表彰行事における「産物」「技術・ほ場」「経営」「女性の活躍」等に求められる審査基準に加えて次の点を考慮の上、選賞審査を慎重に行う。

- ① 出品財の性質・内容が抜群で、**広く社会の賞讃に値する**ものであること。
- ② 出品財の基礎をなす**技術及び経営が特に優秀**であること。
- ③ 出品財が**農林水産業の近代化と産業的発展に役立つ**ものであること。
- ④ 出品財が**地域社会に貢献する**ものであること。
- ⑤ 出品財について、**人物、団体等が健全**であること。

の賞讃に値するものであること」、2番目「出品財の基礎をなす技術及び経営が特に優秀であること」、3番目「出品財が農林水産業の近代化と産業的発展に役立つものであること」、そして4番目「出品財が地域社会に貢献するものであること」、最後に5番目「出品財について、人物、団体等が健全であること」、こういう五つの基準をもとに慎重に審査が行われました。

実際の審査経過ですが、まず令和6年7月23日に第1回の林産分科会を開催しました。

ここでは書面及び合議審査によって現地調査の対象となる3候補財を選定しました。それに続いて、令和6年8月7日、21日、22日に、ここで選ばれた3候補財について現地調査を実施しました。そして8月22日に第2回林産分科会を開催して、現地調査で行わ

れた結果についての報告に基づき、合議審査によって三賞の候補財を決定しました。

そして、最後、10月1日の中央審査委員会の第2回総会において、合議審査によって三賞の受賞者が決定されました。この林産部門の選考委員としては、委員が3名、私が主査、そしてこれからパネルディスカッションにも登壇していただきますが、葛城さん、そして丹下さんの3名が委員。そして専門委員として、伊藤さん、久保山さん、興梠さん、坂野上さん、山崎さん、吉本さん。そして配属専門委員として山本さん。これらいろいろな分野の研究者、あるいは経営者の方々、林業、森林に関わる方々が選考委員を務めました。

その結果、選ばれた三賞の受賞者がこの御三方になります。株式会社T-FORESTRY（辻村さんが代表を務められております）が、天皇杯。それぞれの受賞に当たっての性格を一言であらわすような言葉をみんなで考えたのですが、この場合は「森林

サービス産業の推進による都市近郊での新たな森林経営」ということで高く評価されました。そして、内閣総理大臣賞は、北海道で苗木づくりをされている惣田さん。そして日本農林漁業振興会会長賞としては、静岡で林業経営をされている山田さんが選ばれたということになります。

今回、受賞されたT-FORESTRYの辻村さんの略歴をご紹介します。昭和31年に

第63回農林水産祭林産部門の選賞経過

★ 選賞経過

- ・ 令和6年7月23日 第1回林産分科会を開催
(書面及び合議審査により現地調査対象3候補財を選定)
- ・ 令和6年8月7日、21日、22日に現地調査を実施
- ・ 令和6年8月28日 第2回林産分科会を開催
(現地調査報告の上、合議審査により三賞候補財を決定)
- ・ 令和6年10月1日 中央審査委員会第2回総会を開催
(合議審査により三賞受賞者を決定)

★ 選考委員

(委員) 田中 浩(主査)、葛城奈海、丹下 健
(専門委員) 伊藤幸男、久保山裕史、興梠克久、
坂野上なお、山崎靖代、吉本博明
(配属専門委員) 山本信次 以上10名

令和6年度林産部門の三賞受賞者

★ 天皇杯 株式会社 T-FORESTRY (代表 辻村 百樹) (神奈川県小田原市) 経営 (林業経営)

森林サービス産業の推進による
都市近郊での新たな森林経営



★ 内閣総理大臣賞 惣田 政宏 (北海道広尾郡広尾町) 技術・ほ場(苗ほ)

高い技術力と漁業関係者との協働による
トドマツ、カラマツの優良な苗木生産



★ 日本農林漁業振興会長賞 山田 芳朗 (静岡県静岡市) 経営 (林業経営) 認証森林での高密度路網と車両系林業機械の 活用による高収益な林業経営



お生まれになって、その後、昭和54年にいすゞ自動車に入社されて以降、多様な活躍をされて、30年間近く、いすゞにお勤めになった後、平成19年に江戸時代から続く辻村山林・農園を継承されて、8代目に当たるということです。平成22年、今回の受賞のメインの活動となるかと思

令和6年度天皇杯受賞者
株式会社T-FORESTRY代表 辻村百樹 略歴

(1) 履歴

昭和31年 9月12日生まれ
昭和54年 いすゞ自動車(株)入社 商品企画、宣伝、広報、アメリカ駐在等を歴任
平成19年 神奈川県と山梨県で江戸時代から続く山林・農園を継承(8代目)
平成22年 株式会社T-FORESTRYを創設し、山林経営と共にフォレストアドベンチャー、フォレストバイクなどの多目的森林活用を展開
令和5年 環境省自然共生サイト認定(後期)

(2) 表彰歴

令和6年 国土交通省自転車活用推進功績者表彰

いますが、株式会社T-FORESTRYを創設して、山林経営とあわせて、フォレストアドベンチャー、フォレストバイクなどの多目的森林活用を展開され、また令和5年には環境省の自然共生サイトに認定されています。また、表彰歴としては国土交通省のこのような賞も受賞されているということになります。

簡単に辻村さんの評価のポイントをご紹介します。

最初に「受賞者の取組の経過と経営の現況」ですが、辻村さんが管理運営する森林は、江戸時代に商家であった同社代表の辻村氏の祖先が小田原藩に金銭面で貢献した功績によって与えられた、藩有林の永代管理権を承継したものです。この森林は現在65年生以

令和6年度天皇杯受賞者
辻村百樹氏 評価のポイント①

★ 受賞者の取組の経過と経営の現況

受賞者が管理運営する森林は、江戸時代に商家であった同社代表の辻村氏の祖先が小田原藩に金銭面で貢献した功績により与えられた、藩有林の永代管理権を承継したものである。当該森林は、現在65年生以上のスギ、ヒノキの人工林が主体であり、林齢300年を超えるスギ林もある。

伐採後の植林、保育による支出を考慮すると収益が見込めず、一時的に主伐を休止し、森林組合に施業委託をして間伐を行っているが、森林を余暇のための活動空間として活用することを発案し、平成22(2010)年2月にT-FORESTRY社を設立した。

同社が運営する森林空間活用サービス施設「フォレストアドベンチャー」は、年間2万人が訪れる人気スポットに成長している。

上のスギ、ヒノキの人工林が主体ですが、林齢300年を超えるような非常に大きなスギ林もあります。そうした森林での林業経営に携われる中、伐採後の植林、保育による支出を考慮すると、現在は収益がなかなか見込めない状況に直面されます。その対応として、一時的に主伐を休止し、森林組合に施業委託をする形で間伐は続けつつ、森林を余暇のための活動空間として活用することを発案して、平成22年2月にT-FORESTRY社を設立されました。森林空間活用サービス施設「フォレストアドベンチャー」は、現在では年間2万人が訪れるような人気スポットに成長している状況にあります。

「受賞者の特色」は一言で言うと、高齢級の森林を活用した森林サービスを展開していることとなります。T-FORESTRYが運営するフォレストアドベンチャーは、1haの森林内で、地上から高さ10～22mの木々の間に張られたワイヤーをジップスライド（空中滑空で

す）あるいは樹間の歩行をしながら森林内を巡ることができるような施設です。これに加えて、平成30年からは、2.5haの森林内で既設の路網を活用したマウンテンバイク用のコースを10種類、総延長2.5kmを整備して、フォレストバイクの事業も開始されています。こうした森林空間を活用したサービスの提供によって、ファミリー層、そして若者グループ層を中心とした集客に成功されているということです。

そして、三つ目の評価のポイントとして「普及性と今後の発展方向」ですが、T-FORESTRYは、令和6年3月にフォレストアドベンチャーをリニューアルオープンしています。アドベンチャーコースを変えるなど、これまでのリピート客を飽きさせない工夫

をし、林内の枯損木、危険な枝の除去等、安全性の確保を絶えず行いつつ運営されている。また、この施設は立木をそのままの状態を活用しています。設備を撤去するだけで以前のような森林に戻すことも可能ということで、経営している森林を壊すことなく、こうした活動を行っているわけです。そして、高齢級の森林資源、立地等に適応した森林空間活用サービス施設の設置によって、森林空間を活用するという手段で資金を獲得して、それをさらに森林管理にフィードバックするという形で、代々育んできた森林をこれからの後世に引き継ぐような取組を進めておられるということになります。

以上がT-FORESTRY、辻村百樹さんの活動の選賞に当たってのご報告になります

令和6年度天皇杯受賞者

辻村百樹氏 評価のポイント②

★ 受賞者の特色

＜高齢級の森林を活用した森林サービスを展開＞

フォレストアドベンチャーは、1haの森林内で地上から高さ10～22mの木々の間に張られたワイヤーをジップスライド（空中滑空）や樹間歩行をしながら森林内を巡ることができる施設である。

加えて平成30（2018）年からは、2.5haの森林内で既設の路網を活用したマウンテンバイク用のコースを10種類、総延長2.5kmを整備し、「フォレストバイク」の事業も開始した。

こうした森林空間を活用したサービスの提供により、ファミリー層と若者グループ層を中心とした集客に成功している。

令和6年度天皇杯受賞者

辻村百樹氏 評価のポイント③

★ 普及性と今後の発展方向

同社は、令和6（2024）年3月にフォレストアドベンチャーをリニューアルオープンした。アドベンチャーコースを変えるなどリピート客を飽きさせない工夫と、林内の枯損木・危険な枝の除去等安全性の確保を絶えず行っている。

また、同施設は立木をそのままの状態を活用しており、設備を撤去するだけで以前のような森林に戻すことも可能である。

高齢級の森林資源、立地等に適応した森林空間活用サービス施設の設置により、森林空間を活用するという手段で資金を獲得してそれを森林管理に充てることにより、代々育んできた森林を後世に引き継ぐ取組を進めている。

す。どうもありがとうございました。（拍手）

○司会 田中様、どうもありがとうございました。続きまして、業績発表に移ります。業績発表は、天皇杯受賞のT-FORESTRYの代表、辻村百樹様にお願いいたします。

【業績発表】令和6年度（第63回）農林水産祭林産部門 天皇杯受賞

株行会社T-FORESTRY 代表取締役 辻村 百樹

皆様、改めまして、こんにちは。T-FORESTRY代表の辻村百樹と申します。本日は、このような栄えある場所にお招きいただきまして、また私の拙い説明を聞きに、お忙しい、また暑い中をお越しいただきまして誠にありがとうございます。ここに「トップリーダー発表会」とありますが、余りのおこがましさに、今日、この会場には真のトップリーダーの方々が多数お見えになっておりまして、その前でプレゼンテーションをするのは甚だ緊張するところでございますが、30～40分、私の話にお付き合いいただきたいと思います。

今、さまざまに先生からも私のプロフィールについてご紹介いただきましたが、私自身、辻村家の8代目ということで、辻村百樹という名前が象徴するように、祖父からは林業を継げということで名前を付けられてしまいました。ただ、林業を継げと言われたことは名前だけで、父からも、祖父からも、暗黙の力がのしかかってきましたが、実は言われたことはないということで、自分のことは自分で考えろというのが、この8代続いてくる林業というものの本質ではないかなということでございます。

ということで、私の父は95までの長寿でしたが、ほぼほぼ「ああせい、こうせい」ということは何も言われたことがなく、実は最後、T-FORESTRYという会社をつくったこともうちの父に言ったか言わないか、言わないでつくってしまったかなというぐらいの話ですが、知っていたと思いますが、それについて何も言わず、父も継いだときには祖父から多分何も言われずということで、父も好きな学者の道を歩んでおりました。私も好きな車の道を歩んでおりました。ただ、後々、最後は林業の経営に入ると。そういう暗黙のうちにきたというのが正直なところでございまして、名だたるトップリーダーの方々のように、すごい責任を背負って、若いころから林業をということとはちょっと毛色が違ったことをしております。

ということで、今日、お話しすることも、まさか、まさかの天皇杯というのが正直なところでございまして、神奈川県というのは、後ほど出てくるかもしれませんが、名だた

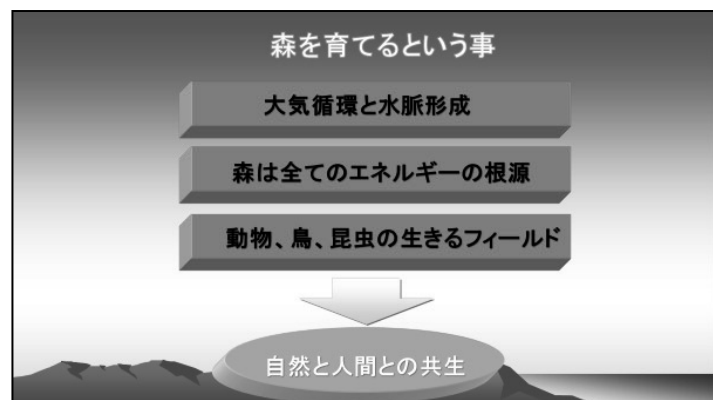
る林業県ではない。その中で林業ということでこういった賞をちょうだいできたということとは、本当に我ながら不思議でございますが、これが時代に合う一つのことなのかなと受けとめております。

ということで、今日、お話しする内容は、皆様にとってみては、何も学術的なデータもなく、非常にわかりやすい、どなたにでもわかっていただくためにつくった資料でございますので、少し頭を柔らかくして、林業の世界というよりも、この世の中の今の動きの中でこんなことをやっているということがあるなというふうにお聞きいただければと思います。

ということで、本題に入ってまいります。フォレストアドベンチャー、フォレストバイク、後々説明してまいります。組み込んだ新しい森林経営ということでお話を進めてまいります。

これは皆様方にはあたりまえの話、あえて素人向けにするようなお話をしてしまいます。

「森を育てるという事」、これは言ってみれば、「大気循環と水脈の形成」、そのことの役立てということ、そのうちの一環ということと認識しております。ただ、これを認識しないと、私も林業という世界に後から入ったようなものなのですが、森の中の木の生産ですとか、出荷、製材、使い方、そういうことにどうしても目が行ってしまいますが、自分たちのやっていることはもっと大きな、地球そのものの中のごくごく、ごくごくわ

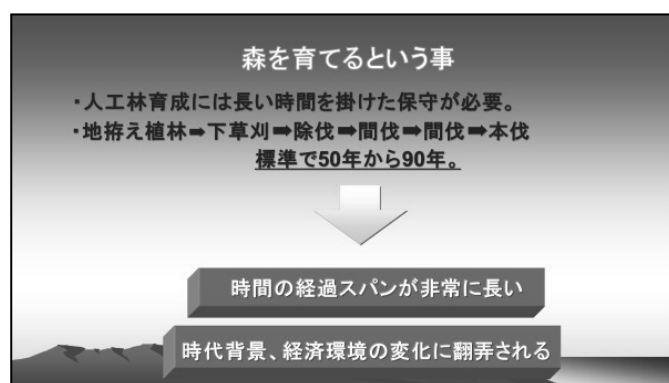


ずかなことですが、その一つを担っている、その視点が必要だと思っております。ということで、大きく出ました。「大気循環と水脈形成」ということが森を育てることなのだろうと思っています。

それから「森は全てのエネルギーの根源」ということで、今日来ていらっしゃる方の年齢層からすると、皆様、昭和という時代を知っていらっしゃるかもしれませんが、昭和の頭ぐらいは、ほとんどのエネルギーというのは森、里山から来ているものだったということを認識されていると思います。それから明治維新の後、石炭、石油、原子力といったもの、それまでは木質の材料、水、そういったものが日本国、世界もですが、支えていたエネルギー、それを生んでいるのは森ということで、すべてのエネルギーの根源と言い切ってしまうても過言ではないかと思っております。

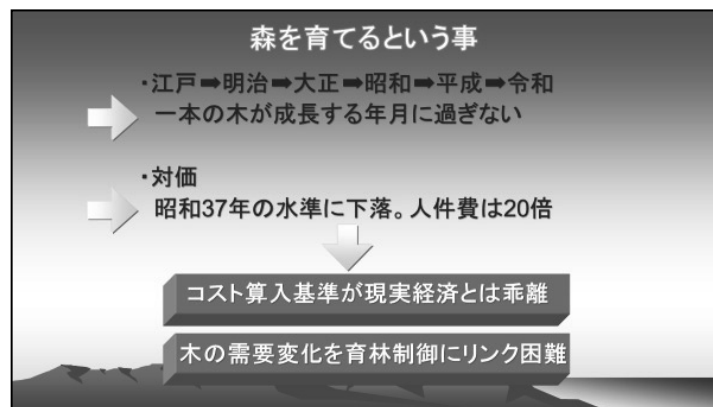
そして最後が「動物、鳥、昆虫の生きるフィールド」ということです。私が強く認識するのは、これを書いた最初の「動物」というところに「人間」というものも含まれるということで、何も人間だけを特別扱いするわけではないということで、人間を含む動物、鳥、昆虫、それが生きるフィールドであるということです。とは言え、人間というのは火を使うことができ、知恵を使うことができ、武器を使うことができということで、ちょっと毛色の違った歩みを進めている動物ですので、人間と自然との共生ということが大事になってくるということで、共生という意味は決して人間が上に立つものではないという認識をしております。

これも当たり前のことですが、「森を育てるという事」、特に人間の手が入った人工林の育成には長い時間をかけた保守というのが必要です。地拵えから始まり、植林をし、下刈りをし、除伐をし、



間伐をし、また間伐をし、私のところは3回ぐらいの間伐をやっていますが、そして最後は本伐ということで、標準から言っても50年から90年、こういった時間の経過の-spanが非常に長いということです。ということは、時代の背景、経済環境の変化に翻弄されるといふことで、その一代で済む話ではなく、植えたときによいと思ってやったことが、結果的に、さあ、切ろうと思ったら世界が変わっているというのが今の世の中にも通じるところだと思います。

私の家が山を殿様からいた
だいたのが江戸中期、末期ぐ
らいのところですが、そこか
ら明治、大正、昭和、平成、
令和と移り変わってきており
ますが、1本の木が成長する
年月にすぎない。その前から



ありますから、うちの山で一番古いので350年というスギがあります。あとは300年のスギ
がまだ100本ほど残っております。そういったことで、1本の木が成長するにすぎないとい
うところで、人間は何代にもわたってもがいて生きているということです。

ここで、少し生々しい話になりますが、一方で、対価、木の値段ですね。これは皆様ご
存じのように、昭和50年をピークとして、今、昭和37年ごろの価格ではないかと思ってお
ります。昭和37年の山の人の人件費、そういったものからすると、大体20倍。昔は山の人
足代が安かったということもあって、一般よりもちょっと安かったのではないかと思います。
今は20倍。ところが、コスト算入基準というのが現代経済と乖離してしまいますね。
長い長い年月。ということは、木の需要の変化を育林の制御にリンクさせるというのはほ
ぼほぼ困難ということで、先ほど申し上げましたように、先人が「こいつが育ったときに、
いい木に育って高く売れるぞ」と想像していたものが、50年、60年、90年、100年といっ
たときに全く違う環境になっているということで、その間、途中で木の性質を変えるわけ
にはいきませんので、そういったことをリンクするのが困難ということです。

これはちょっと1年
古い資料ですが、我々
の世界が一番下のスギ
の山元価格。一方で、
製品価格等々、丸太価
格とかは上の方にあり
ますが、一貫して下が
ってきたのが山元価格



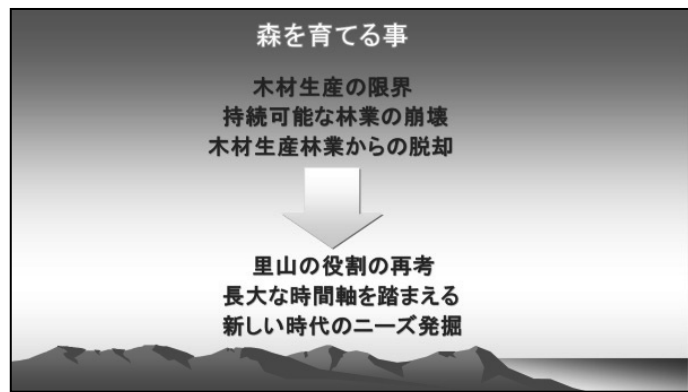
で、この差が開けば開くほど、山元が苦しんでいるということです。今日、来られている
方たちは、皆さん、この辺は十二分に理解をいただいていると思います。ただ、この中

でもどうも理解が進んでいないなと私が個人的に思うのが、この全部が立米という単位で物事が語られております。実は私の祖父の付けていた帳なりを見ますと、「石」という単位は出てくるのですが、立米という単位は、戦前、戦後の最初ぐらいまで出てこないんですね。祖父の記述のすべては何千本植えて、何百本間伐してどうのこうのと、全部本数単位。胸高、直径の単位で書いてあります。ということで、立米でいくと、今でも3,500円から4,000円あるじゃないかと、ここにいらっしゃる方は別ですが、山で一般の方々にいろんなお話をすると、単位というのが全くわかっていなくて、「1本の木は幾らですか」ということがなかなか通じない。今、1本のスギを60年育てて、もろもろの経費を引いて、本当に山元が収入として来るのは一体幾らだと思いますかというお話をすると、60年ぐらいの1本の木を前にして「大体30万円ですか」ぐらいから始まるんですね。「いやいや」、「10万ですか」、「いやいや」と。大体皆さんの意見が一致するのが「1万円ぐらいですか」というふうになる。そこから「いやいや、これ1本700円。下手をすると200円」。もちろん良い木はありますよ。でもおしなべて。もともと素性の良い木はもっと高く残りますが、それぐらいの単位というのが、今の我々の、皆さんもそうですが、プロの中で流通している立米という単価が曲者であって、なかなかそれが一般の方たちには、いかに林業というのが疲弊しているというのが伝わらない。

今、お米の話が出てきて、生産者、農家が大変困っているということが話題に上っている。これはいいチャンスだなと思っておりますが、山元がどれだけ大変なことか。ただ、難しいのは、農家は何万人ですが、山持ちも何万人もいるのでしょうが、本当に林業をやって生計を立てているような山持ちというのはものすごく少ないんですね。その方たち、今日いらっしゃる名だたる林業家の方たちの面積を足すと、国土の何%かというぐらいの単位になるにもかかわらず、所有者人数は数人ということなので、選挙の票になるのはどっちかといったら、林業はならないよねというのが悲しいところです。そういうことも含めて、もっと簡単な話をしますと、辻村の山は、辻村農園、山林といって、梅林と筍の生産、今はまさしく収穫期ですが、そういったものもしています。筍1本売ると、生産者価格として1本大体400円とか、500円。60年育てた木が700円とか、800円とか、1,000円。筍1本400円で60年間売り続けられたら、それだけで2万4,000円になるということなので、筍の方がずっと割がいいよねと、本当に不思議な話になります。

というような背景をくどくど言っても愚痴ばかりになりますので、先にいきますが、そういう世界を我々は生きているということです。

ということで、木材生産の限界、山元にとってはほぼ限界、ヒーヒー言っているということです。ということは、持続可能な林業をやる人がいなくなるということで崩壊という言葉で書きましたが、そこにもつながりかねない。それから



何が起きてくるかというと、木材生産林業から脱却せざるを得ない、という方々が多くなる。多くは山を捨ててしまう。何がしかのお金になるかといって山の木を切って、あと、植えることができなくて、そのまま所有していることも忘れてしまう、そんなことが今の日本で起きています。

ということをいつまでも愚痴を言っても始まりませんが、8代目ということで山を継いでしまっとうしよう、というところから始まったわけです。私はサラリーマンを長々やっておりました。車の商品企画というのは色々なことを考え、本当に頭を柔らかくして、くだらないことから、流行やら、芸能界やら、いろんなことを考えながら思考するという習性があったものですから、さあ、自分が引き継ぐ里山の役割をもう一回考え直さなければいけないよねと。さっき冒頭に申し上げましたが、木だけを見ていても違うよねと思っておりました。とは言え、8代ということの重さというものも無くならないものですから、長大な時間軸というものも踏まえなければいけない。そこにサラリーマン時代に経験のあった、新しいことをやる、新しい時代というものを世の中に訴える製品をつくっていったので、そういったニーズを探る、そんなことを考えました。

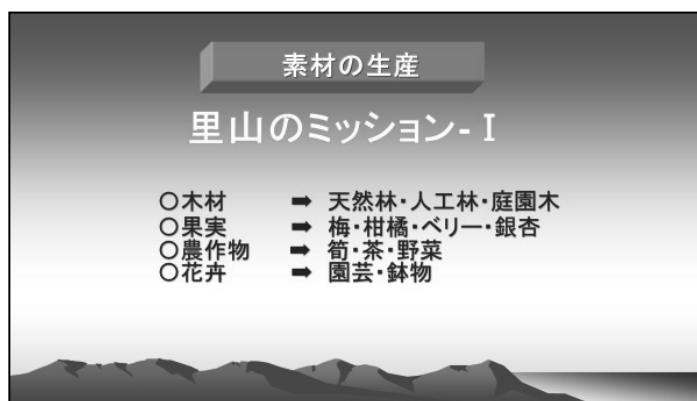
そこで、私はサラリーマンをやめて、里山でできるミッションは何かということで、最初からミッションという言葉からスタートしたわけではないのですが、冒頭の映像でもありましたが、ここからは少し説明をしてみたい。

これがうちの山から見たところです。小田原は実は非常に恵まれています。山、里、海、多分1時間で歩いてしまう。車だと、10分範囲で、山の上から町を通って海まで行けてしまう。うちの山か



ら見て、まさしくこれを川がつないでいるということですが、こうすることで、うちの山は山というか丘かもしれないというぐらいところです。実は、もう一つ、山梨の南部町というところにも山林を持っていますが、そこはカモシカ、クマがいるという、本当に急峻な、架線集材でしか材が出せないということで、ここはまた頭が本当に痛いのですが、そういう山と両方持っておりますが、今回は里山という方で賞をいただいたということなので、こんなところでございます。

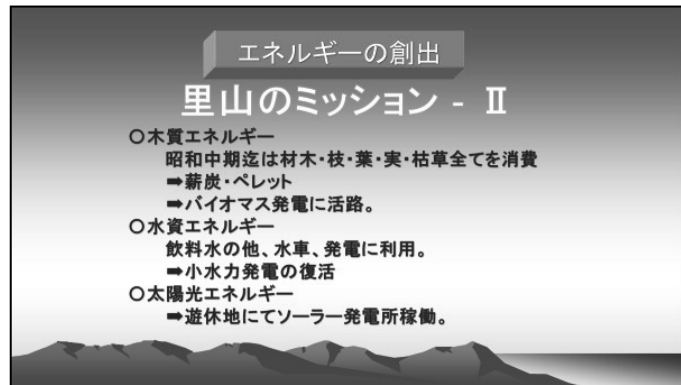
まず、ミッションの一丁目一番地は里山のミッション、素材の生産、これはあたりまえですね。木材です。木材の生産は、いまアイドリング状態、赤字を出してまでやりたくないということです。ただ、赤字を出すと



やりたくないよねといって太っていくと、太い木は要らないと言われてしまうのが今の世の中で、太い木のほうがいいじゃないといって、長伐期施業を目指してはいるものの、それも時代がどうなるかわかりませんが、今現在は太い木は要らないと言われるという非常に困った状態にあります。そんな中でも天然林、人工林、それから庭園木、いろんなものが山にはありますので、うまいぐあいに。たとえば小田原城の内装材、コンクリートのお城ですが、内装は木で改装をしたり、そういったところにいい木を出したり、小田原城の近くに二宮金次郎を祭った二宮神社というところがあるのですが、そこに8年ほど前に大鳥居の建替えということで、山から300年スギを6本ほどお出しした。そういうようなことで、需要のあるところにはいい材を中心にお出しするという林業は続けておりますが、そういったことで、一丁目一番地は素材の生産。農園の方では梅、柑橘類、若干ですが、そんなもの。それから農作物といっても、筍ぐらいです。お茶とか、野菜は挑戦していこうかなと思っています。それから花卉類。実は祖父は辻村農園というものを創設したときに、明治のころですが、日本でも先駆的な温室栽培というようなことをやっておりました。そういったことにもいけたらいいなとは思っております。

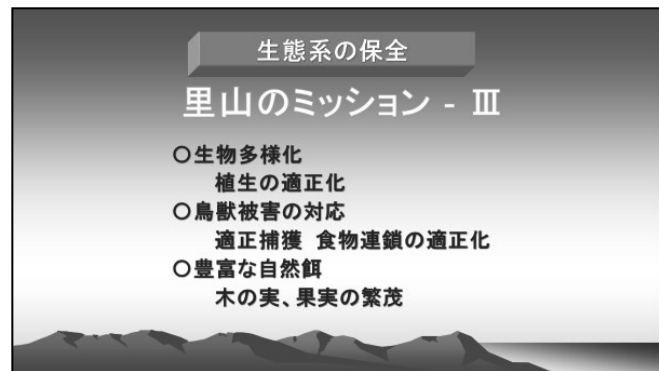
ミッションのⅡは、エネルギーの創出。さっきも申し上げました。昔は木質エネルギーが中心でしたということで、これからバイオマスエネルギー。発電はいろいろな問題があって、挑戦というか、研究はいろんな方とやっていますが、日本で発電をするのはなかなか

か大変だなと。それよりも熱利用の方が活路はあるかなと。ただ、小田原は温暖な場所なので、それほど熱が要らないということで、ここはちょっと足踏みをしているところではありますが、将来課題



としてはバイオマスというのがあると思います。それから水質エネルギー。うちの山からは良い水が出ます。飲料水のほかに、大正時代に祖父が水力発電所というのを、自分の持っていた製材所の動力のほかに、その大正の時代に売電ということで、小田原市にあった紡錘工場に電気を売るとい、今思うと、ずいぶん昔に先駆的なことをやっていたなということです。ただ、第二次大戦後、下から電気が供給されてくるようになったので、これはやめたのですが、これも復活できないかなと。それから第3番目は太陽光エネルギー。さっきの映像にもありましたように、うちの山は木を切ってつくったわけではないのです。実は昭和50年の木材価格のピークということから右肩下がりになったときに、うちの父も非常に危機感を持ちまして、山の手入れをする資力をどうしようということで、山の中にあった非常に深い谷に、神奈川県建設局の建設残土を引き受けて、何がしかのコストをいただいて、埋め立てが終わったところに木を植えて地主に戻す、そんな契約をしていたのですが、それが戻ってくるというときに、ちょうど3.11が起きて、3.11で小田原は特に計画停電の被害にあいましたので、地元は地元のエネルギーをつくらなければいけないということで、ちょうど埋め立てが終わった適地がうちの山にあったということでソーラー発電に踏み切りました。実は、今回のご審査をいただく中でも山に太陽光の発電所があるというのがどちらに転ぶかなと。今、自然破壊とか、いろいろな問題も指摘されていたので心配はしておりました。ただ、心配したとは言ったものの、非常に理に適ったと言っては震災がきっかけなので言い方は大変申し訳ないのですが、そういう地元でエネルギーをつくらなければいけないという時代に入ってきた。それからいつまでも東京電力に頼っているわけにはいかない。そういう中で、昔から里山からエネルギーを里に送っていたということを、太陽光を集めるということで形は変わったが、里山からエネルギーを送る、その役割は変わらないということで、自分を納得させながら、そういうきちんとした理念のものに展開しているということを先生方にもご理解いただけたのがとてもうれしかったことでございます。

それからミッションのⅢは、生態系の保全。先ほども人間は動物の一部と申し上げたのですが、生物多様化ということで、一つは植生の適正化。苔から始まって高齢木までいろんなものがこの山にはあります。そ



れをできるだけ多彩に保存、共生をしていきたいなということでやっております。一方で、とは言え、シカ、イノシシ等々で、我々がやっている筈なんかは、我々が食べるより先に、おいしいところをイノシシが持って行ってしまふ。せっかく植えた木の苗はシカが食べてしまふ。大きくなった木は角こすりで傷つけられて枯れてしまふ。いろんなことで小田原も被害を多大に受けています。ということは、動物対動物ということで、適正に捕獲をして食べてしまえということもあります。食べてしまえですが、クマなんかには食べられてしまふこともあるので、そこは本当に動物とどう向き合うかということだと思います。人間が偉いという意味で獲っているわけではない。そこはうまく共生したいなと思っています。それから豊富な自然の餌。うちの山は一番上のところに箱根からクマが下りてきた形跡が一時期あったくらいで、特に被害はまだないが、とにかく木の実だとか、果実だとか、里に下りてこないようにしたいよねということで、自然の恵みは保全するようにしています。

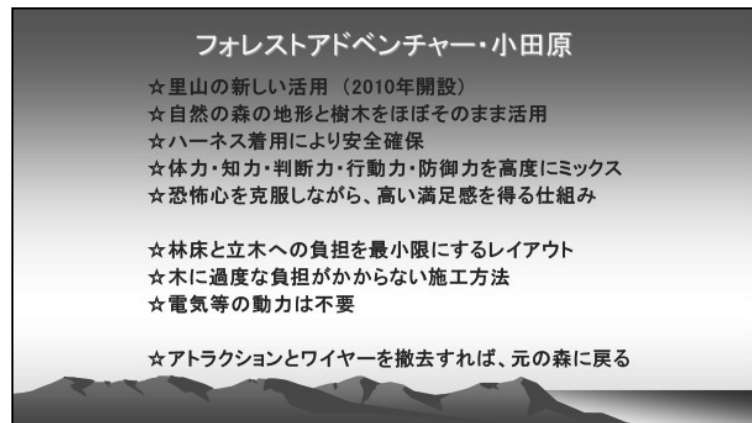
そして最後が今回の本番ではありますが、里山のミッションⅣ、余暇の提供。これは当時、十数年前には新しい概念だったかなと自分では思っています。これは言葉遊びです。車の企画などをするときも、ともかくい



ろんな言葉を出すということをやっていたものですから、こういうものに慣れてしまつて、私も言葉遊びが好きです。あたりまえの歩く、走る、登る、降りる、飛ぶ、滑るなんていうのは山でできることですが、山でできることをいろいろ書き綴ってみると、いろんなところに乗ったり、探検したり、眺めるといい眺めがあつて、休むと気持ちがいいし、癒されるし、寝ることもできる。ところが、闘うこともしなければいけない。寝ているとイノ

シシが出てくるかもしれない。食べるというのも、こっちも食べるが、向こうも食べるぞということ。それから笑ったり、泣くこともある。育むこともできるが、叱られることもあるし、和むこともあるが、蹴飛ばされることもあるよね。安心する、心が安らぐこともあるが、恐怖心も。夜の闇の中の山ほど怖いものはないくらいですね。それから弾けることもあるし、耕すこともあるし、収穫もすることができる。こういうような言葉遊びをしていると、山というのはこんなに可能性があるよねということで、こんなことができる山というのはまだまだいろんなことに使えるし、癒されるし、何かないかなということから発想が広がってきたわけです。

そこで作ったのがフォレストアドベンチャー・小田原というものです。これは2010年に開設しましたが、里山の新しい活用です。これは実はヒントというか、私が山を継いだ当初、こんな



ことを考えていたときに、日経新聞の夕刊に、これはフランスのものです、フランスから日本の代理店が入れて河口湖で展開したという紹介が出ていて、そこで何かピタッとくるものがあって、翌日にはそこに連絡をして現地を見に行くと覚えております。これはもともとフランスが企業の研修施設として、たとえば木の上にみんなで登ってしまったら降りられなくなってしまった、どうやって救う、どうやってサバイブする、そういう研修の仕方、これがなかなかよくできていて、レクリエーションとしてもおもしろいということから施設ができたというふうに、そろそろ20年ぐらい前かな、フランスのアヌシーというリゾート地が発祥の地です。実は、フォレストアドベンチャーと言っていますが、フランス語で言うと、ラフォーレアドベンチャーというのですね。そのとおりですが、日本語でアドベンチャーだと、ちょっと違う冒険にになってしまうものですから、その代理店がフォレストアドベンチャーという英語読みにしたということです。

これは自然の森と地形、樹木をほぼそのまま活用するのが一番のミソです。ハーネスを着用します。このハーネスはフランスのものを必ず着用します。フランスのハーネスはアルピニストも使う、ペツルという会社ですが、こういうものをコスト的にケチって、訳のわからない国のものとかを使って、万が一何かがあったらということを恐れて、安全のた

めには投資も惜しまないという姿勢でハーネスにはいいものを使っています。これは何がいいかって、エネルギーが要らない。エネルギーもお客様のエネルギーです。そのお客様のエネルギーで、体力、知力、判断力、行動力、防御力、いろんなもので木から木へ1人で渡らなければいけない。お子さんも親と一緒に渡ることはできないので、親御さんが見ている中、1人で渡らなければいけないというのが原則ですので、そういったことを、小学校1年生から大人のコースはできるのですが、ミックスして、恐怖心を克服しながら高い満足度を得て、その上でお金をいただくという、非常に都合のいいと言えば都合のいい施設です。

これはやる側にとっても、森の林床、それから立木への負担を最小限にするレイアウトを取っておりまして、木に過度な負担がかからない施工方法というものを取っております。いま申し上げたように、動力は不要ということです。そして先ほど先生からの評価ポイントにいただきましたが、もしやめるときに、アトラクションとワイヤーを撤去すると、ただの森に戻るだけ。多くの公園が開発をして、ブルドーザーを入れて、いろんなことをやる、そういうことは一切ないというものです。

これは小学校1年生以上。
最高年齢85歳ぐらいの方まで
やられたと思いますが、1ha
の中に9回、梯子で登って、
安全具をつけているのですが、
いろんなやり方で一本橋だっ
たり、グラグラ揺れる橋だっ

フォレストアドベンチャー・小田原

コース概要

ジップトリップコース 対象: 小学1年生以上
用地面積: 1ha 9サイト(木に登り⇒渡り⇒滑る) 38アクティビティ
所用時間: 1時間半〜2時間
料金 : 4,000円

キッズコース 対象: 概ね2歳〜8歳(身長90cm以上)
用地面積: 500㎡
所用時間: 45分間(時間制)
料金 : 2,000円

年間入場者実績
21,000人



たり、そういうもので、木から木へ空中で渡って、最後は滑車をつけて滑って降りてくる。
または、このごろは、木から木へ滑って渡れるようなアクションも加えるリニューアルを
しましたが、そういったことで、所用時間は1時間半から2時間、料金は4,000円いただ
いています。キッズコースというのは、そこまでできない、概ね2歳から8歳ぐらいのお
子さんが、親御さんが地上からフォローできる範囲で45分ほど、これもお子さんによつて
すごく能力の差があつて、めちゃくちゃうまくできる子と、ただぶら下がっているだけと
いう子といろいろいらっしゃいますが、とにかくこれはどちらかというと、親御さんが喜
んで、フォトジェニック、写真を撮るので大満足というようなことです。年間の入場者数、
今、ちょっと酷暑だったり、朝、テレビをつけると、我々からすると、けしからんことに、

外に出るな、運動をするなど気象庁が言うものですから、日本人はすぐそれを守って、森にいらっしやると、下にいらっしやるより、最低3度は気温が違うし、うちの森は溪流が流れていてさらに涼しい、そういうことを気象庁はつけ加えてほしいと、いつも家内と言っているんですが、とは言え、2万人内外のお客様においでいただいています。

それからフォレストバイクというのが次のものです。一本足打法をするわけにもいかないので、いろんなことを考えている中で、マウンテンバイク、バイクと言っても動力のついていない方の自転車です。自転車のマウンテンバイクのコースをつくりました。

2018年です。これも自然の森と地形と樹間、木の間をほぼそのまま活用して、いわゆる作業路を活用しているようなものです。もう一つ、フォレ

フォレストバイク・小田原

- ☆里山の更なる活用（2018年開設）
- ☆自然の森の地形と樹間をほぼそのまま活用
- ☆マウンテンバイクの基礎の習得（走る・曲がる・止まる）
- ☆体力・知力・判断力・持久力・マナーを高度に育成
- ☆ファミリーで楽しむ新たなマウンテンバイクの世界感醸成

- ☆雨水管理を盛り込んだコース建設による林内表層維持
- ☆森林管理路、トレランコース等複合使用
- ☆獣（鹿・猪）の里山への進入を威圧防御（人と獣との緩衝帯）

☆森の穏やかな活用



フォレストバイク・小田原

コース概要

用地面積: 1ha トレイルコース、パンブトラック、ジャンプセクション
所用時間: 3時間～6時間
料金: 初回安全講習4,000円 フリーライド3,000円から
対象: 概ね4歳～70歳
年間入場者実績
5,000人



ストアドベンチャーで学んだことで、きちんとインストラクターがついて、最初に安全講習をするということですね。走る、曲がる、止まる、山の走り方、そういったものを講習して、ライセンスを取っていただくと、グループごとに山を走っていただけるというような形にしています。これも体力、知力、判断力、持久力、マナーというものを育成して、ファミリーとしても楽しんでいただくということです。いままでマウンテンバイクというと、どちらかというと、日本だと、スキー場の夏場利用で、リフトで上がって、ダーツとダウンヒルで走ってくる醍醐味というのが主だったのですが、うちは林間を気持ちよく走る、そんなコースを作っています。

一番のポイントはコース作りです。これは特に林業をやっていると、道が流れるというのが一番厳しいのですが、毎日使うコースですので、雨が降るたびに道が崩れてはなりませんので、とにかく水、水の管理ということに非常に気を遣ったコースを作っています。これを作る専門家、日本人で2人ぐらいいます。これはオリンピックのコースとかを

作るということで、ニュージーランドやカナダで実績を積んだ人ですが、彼のノウハウで雨水の管理を最優先にやってもらっています。これは林業の作業道とか、作業路には応用できていると思っています。また、これは森林管理路とか、トレラン、走る方ですが、そういったコースにも適用可能です。それから、さっきのフォレストアドベンチャーもそうですが、人が入って道を歩いている。ちょっと不思議な機械が走り回っている。そういったものは獣に対するある意味威嚇になると考えています。ですので、後で出てくる、やつつけてしまうという方の話と同等に、もう少し柔らかい、ソフトな感じで、里山というのは、獣のいる奥山と里との緩衝地帯なので、そののところに人が入ることによって、柔らかに緩衝体として、おまえたちが来るところとここは違うよ、もうちょっと山の方に行っておいたほうが安全だよ、そういう効果を今狙ってやっていますし、徐々にそういった感覚が出てきています。とは言え、敵もさるもの、新しいコースをインストラクターが開けると、翌朝にはそこにシカの足跡、イノシシの足跡、一番歩きやすいところを彼らは視察に来るとというのがよくわかるのですが、とは言え、人が段々入ってくると来なくなってくるといふうに期待をしています。要は森の穏やかな活用ということで取り組んでおります。

これは3ha、2km内外ということですが、いろんなコースを作っております。トレイルコース、ジャンプするコース、パンプトラック、いろんなものがあって、初回講習も含めて4,000円。概ね4歳から70歳ぐらい。これは富裕層も含めて多くのお客様、今、年間5,000人ぐらいの方がいらっしゃっています。

時間がなくなってきましたが、最後にハンターバンクという取組についてご紹介します。小田急と書いてありますが、小田急電鉄、小田原急行で小田急なので、本来、小田原行き

小田急ハンターバンク

ハンターバンクとは？

- ・狩猟に興味のある方と、獣害に悩む農林家繋ぐ会員制の狩猟マッチングプラットフォーム

会員プロフィールは？

- ・自然との触れ合いを求める都市在住者
- ・初級ハンター、狩猟免許保有者
- ・ハンティング情報交換を求めるビギナー

特徴？

- ・直ぐに始められる ⇒ 会費に異・狩猟具・保険等が含まれ参入が容易
- ・週末狩猟が叶う ⇒ 平日▶カメラ確認 週末▶止め刺し、解体、ジビエ獲得
- ・狩猟基礎学習 ⇒ プロから3か月で獣害被害対策の基礎を学習



の電車なのです。小田急はちょっと山側を路線の一部が走っていて、イノシシとか、シカが飛び込んできて、事故があつてダイヤが乱れることが結構あるということで、そこから悩みを解決する方法として、彼らの抱えているお客様のいる都会でハンターというか、狩

猟に興味を持つ方々が非常に最近増えている。さすがに小田急はそういうアンテナを張っていて、その方たちが実際に捕るということはできないかということのマッチング。これは会費を払っていただいて、サブスクで、私どもの会社がその作業を請け負って、檻を仕掛けて、檻に餌をまいて、檻に入ると、檻なので、イノシシが中心です。シカもたまには入りますが、入ると、センサー付きのカメラでその瞬間を映像中継する。都会にいる方々がその動画を見て、自分の担当しているところに入ると、翌日、翌々日の間に山に行つて、都会から車で1時間ですので山に来て、うちのインストラクターがついて、止め刺しをして、山の中にある解体場で解体をして持ち帰るところまでやる、そういったことです。主なお客様は初級のハンター、狩猟免許保有者、ハンティング情報交換を求めるビギナーということで、すぐに始められる。道具も全部、小田急と我々がそろえて、それをお貸しする。週末狩猟がかなう。平日はカメラで、檻の中なので少し生きている。時間があるときになるべく早く来ていただきますが、止め刺しして解体までやる。それから基礎学習をしたり、これもレクリエーションの一つなので、我々としてジビエの料理のバーベキューとか、料理教室みたいなことまでやって、楽しませることと、自然の脅威と対峙する、いろんなことが学べるということで、今、こちらでも会員が200人を超えており、ビジネスとしても最近は成り立ってきております。

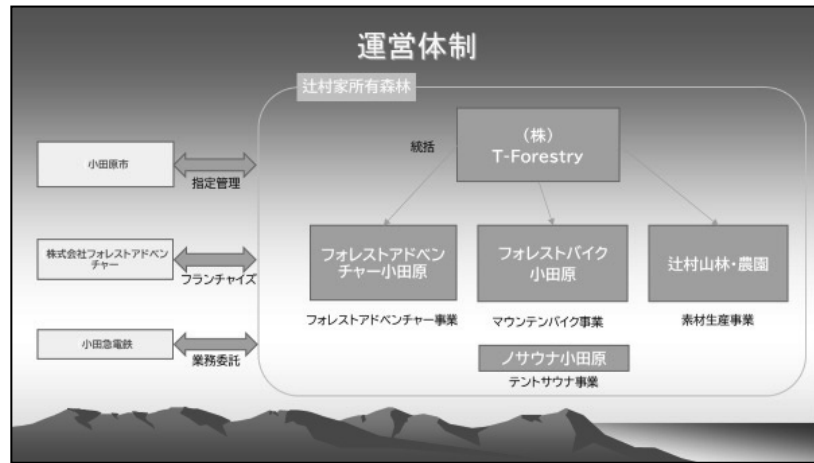
ということで、長くなりましたが、私、現在の小田原については約80haほどの一つのまとまった団地で、飛び地はありません。その中で75%は人工林、5%が自然林。農園が10%ほどあ



ります。これは柑橘と竹林。梅林がメインです。それからエネルギー事業、先ほどのソーラー発電があって、その他のところで余暇提供ということで、全体からすると大きなポジションではないところで次の世代につなげられるだけの資本を稼いでいるということです。

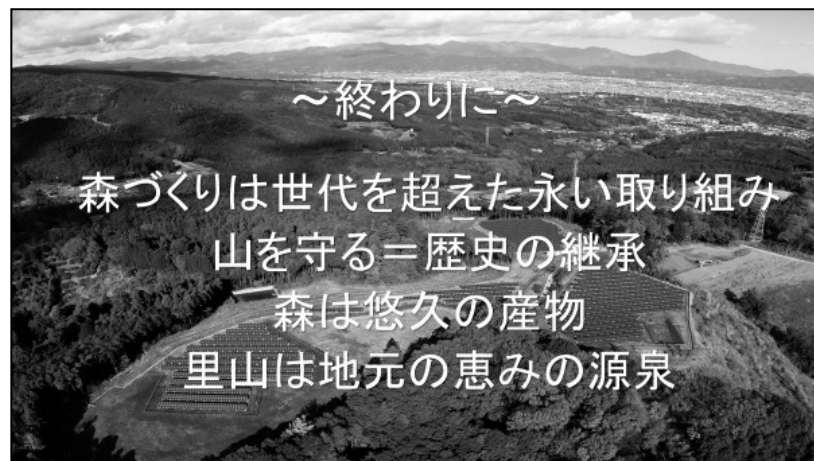
運営体制はこうなっておりますが、小田原市さんとも指定管理ということで、公園ですとか、周りの施設の管理もうちの会社がしております。それからフォレストアドベンチャーという代理店からのフランチャイズ経営をしております。小田急電鉄ともそういった提携関係にある。あと、最後に下にありますが、「ノサウナ」という名前をつけていますが、

最近、森の中のサウナ、森林サウナを始めています。これに意外にお客様が来られて、地元の方というよりも、いろんなところからこのために来られる。うちのサウナの特徴はテン



トサウナですが、山のアロマみたいなもので香りを楽しんでいただいて、何より溪流にそのまま飛び込めるということで、自然児になったようにしてサウナに入れるという施設を展開しております。

最後でございます。
森づくりは、世代を超えた長い長い取組で、山を守るというのは歴史を継承することにはすぎないと思っております。森は悠久の産物で



あって、里山は地元の恵みの源泉である。その中で何ができるかわからないものの、次の世代にやはり美しい森をつなげるということ。実は私自身、サラリーマンをやっている、林業の専門家ではなかったものですから、どうやって林業をやっていくかわからない。なので、一番シンプルに、とにかく山はきれいにしておこう、見て美しい、デザイン的にもきれいにしておこう、それが判断基準です。そんなような素人みたいなことで取り組んでおりますが、栄えある賞までいただけるようになりまして、本当に皆様方に感謝しております。

本日はありがとうございました。（拍手）

○司会 辻村様、どうもありがとうございました。ここまで2件のご報告にご質問などあるかと思いますが、パネルディスカッションの中で会場から参加いただく時間もありますので、その中でお願いをいたします。ここで10分間ほど休憩をいたします。再開は14時45分にいたしますので、それまでにお集まりください。

(休 憩)

○司会 時間になりましたので、再開いたします。これからはパネルディスカッションで
ございます。進行はコーディネーターとして田中主査をお願いいたします。

【パネルディスカッション】

コーディネーター 農林水産祭中央審査委員会林産分科会主査 田中 浩

では、引き続きお付き合いください。田中です。よろしくお願いします。

それでは、本日のシンポジウムの後半に当たりますパネルディスカッションを進めてい
きたいと思います。

まず、登壇していただいたパネリストの皆さんをご紹介します。私のお隣、辻村百
樹さん、よろしくお願いいたします。先ほどはすばらしいプレゼンテーションで見ほれて
しました。あの中でいろいろご紹介されたことをもっともっと深掘りしたり、あの中
でもっとお聞きしたいなと思われることがあったかと思います。今日のパネルディスカ
ッションの中でそのあたりについてもいろんな議論ができたり、また会場の方にも後でご意
見を伺ったりしますので、もしお聞きになりたいことがあったら、考えておいていただ
けるととてもうれしいと思います。辻村さんのお隣が株式会社T-FORESTRYの統括
マネージャーを務めておられる鈴木毅人さんです。よろしくお願いします。もともと辻村
農園では山林を管理する番頭さんのような方がいらしたと聞いていますが、その後を引き
継ぐような形で、現在のT-FORESTRYの屋台骨を支えているというか、まさに番
頭役を務められているので、今日のディスカッションの中でも、辻村さんとともに、コメ
ンテーターだけでなく、逆に答える側としてもお話しいただけるシーンもあるかと思いま
す。よろしくお願いします。そのお隣が、私とともに選賞の委員を務めております葛城奈
海さんです。ジャーナリストでいろんな活動をされていますが、分科会の委員としても重
要な役割を果たしていただいています。よろしくお願いします。そのお隣ですが、国立研
究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所、多摩森林科学園の主任研究員を務めてお
られます平野悠一郎さんです。よろしくお願いします。多分、平野さんをご存じの方は、
きっと登壇されるだろうなと思うぐらい、森林レクリエーションの研究では初期の頃から
いろんな研究をされて、今回はぜひ来てくださいということでお願いしました。今日はご

専門の面からいろんなコメント、質問をいただければと思っています。よろしくお願いします。一番向こう側になりますが、神奈川県県西地域県政総合センター森林部森林保全課副技幹の豊永洋子さんです。よろしくお願いいたします。地元神奈川の森林、そして林業の管理をされているということで、行政の立場からいろいろなコメント等をいただけるのではないかと思います。日ごろからもT-FORESTRYの活動についても大変お詳しいと思いますので、ぜひよろしくお願いいたします。以上、コメンテーター、パネリストとしてご登壇いただいた方々をご紹介します。

それでは、まず、登壇した皆さんに各々のお立場からの辻村さんのご受賞についてのコメントをいただきまして、あわせて一つ是非辻村さんにこの機会に是非お伺いしたいということをご質問いただきたいと思います。順番に進めていきます。その後は会場の方を交えた自由な質疑を行いたいと思っています。あらかじめ、ご発言いただきたいと思います方すでに2人ほどお声掛けしてありますが、その方も含めて、本日ご参加いただいている会場の方々から自由にコメント、質問等をいただきたいと思います。どんな質疑があるかというのを私も楽しみにしておりますので、どうぞよろしくお願いします。その質疑を終えた後に、最後に改めて辻村さんに、本日の皆さんとの質疑を経てのご感想、受賞されたことを受けて今後に向けての思いなどをお伺いしたいと思っていますので、時間を見ながらですが、ぜひ活発な議論ができればと思っていますので、皆さん、ご協力、どうぞよろしくお願いします。

それでは、まず登壇者の皆さんからコメントとご質問をお願いしたいと思います。最初に内輪ですが、鈴木毅人さんからお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

○鈴木（コメンテーター） T-FORESTRYの統括マネージャーをしております鈴木です。立場は先ほど言われたように山の管理、運営の番頭の役割もしているのですが、私は新しいアイデアを企画立案し、そして新しく現実にしていく、そういった仕事をしております。

14年前、東京から移住しまして、アウトドアが元々趣味ですし、大好きだったので、そこから得る自分のインスピレーションと、それからアンテナをすごく伸ばしていますので、海外から、いろんなところの情報、そういったところで新しい事業のアイデア出しをしたり、企画をしたりしております。そういった感じの仕事です。

○田中（コーディネーター） 今回の受賞を受けて、辻村さんのお仕事、自分の活動に対するところ、なかなか言いにくいところがあるかもしれないですが、紹介を兼ねてという

ことでも結構ですので、少しコメントをいただければと思います。その後、この機会に、日ごろ聞いていない辻村さんへのご質問などがあれば、是非よろしく願いいたします。

○鈴木（コメンテーター） 具体的に質問は特にはありませんが。今運営するに当たっていろいろこれからやっていかなければいけないこととか、どうやったらやっていけるかということはいろいろ自分でも考えるところがあるのですが、特に質問というのは。

○田中（コーディネーター） 怖くて聞けないとか、そういうことではないのですか（笑）。

○鈴木（コメンテーター） 普段から聞いておりますので。逆に言うと、辻村家の歴史があるというのが辻村農園山林の特徴ですので、それにどういうふうに合わせていくか、新しいアイデアだけではだめですね。必ず辻村農園山林の歴史に合っているものかどうかという判断をしながらやっているの、その辺はいつもお伺いを立てながら、辻村さんとお話ししながら決めています。何でも新しければいいとか、そういうことではないということをやっております。

○田中（コーディネーター） ありがとうございます。日頃からのコミュニケーションが大変スムーズにいつているということで、全然疑問がないというのは素晴らしいです。本当かなと思ったりもしますが（笑）。

では、私からお二方一緒の質問になるかと思いますが、立ち上げのとき、初期から鈴木さんは関わっていらっしゃいます。

皆さんもすごくご関心があるかと思うのですが、今日のお話の中で、フォレストアドベンチャーが河口湖に開業したのを見て、すぐに連絡を取ってというお話がありました。ただ、本当に新たな仕事なので、それを始めるに当たっては大変なご苦労があつて、その中に新しいスタッフとして鈴木さんをお迎えして進めていくという、初期の立ち上げの段階の困難があつたのではないかと思うのです。今日のお話のようにきれいにお話しされると、どんどん発展して、いい経営をされて、素晴らしいんですが、本当の最初の時点でのご苦労のいろいろというのは、同じような形で森林の活用を考えていく方にもたいへん参考になるのではないかと思うので、もしよろしかったら、お聞かせ願えればと思います。お二方からお願いしますね。

○辻村（業績発表者） わかりました。では、辻村の方から。先ほどのプレゼンテーションでちょっと言い足りないことが幾つかありましたので、その辺を含めまして。

当初、何をやろうか、どうしようかと思っていた中で、フォレストアドベンチャーを知

るに当たって、即断をしたぐらいの形でこれを導入しようと思ったわけですが、うちの山、狭いとは言え、広いものですから、どこでやろうかというようなことで、選定場所とか、そういったところを選ぶという苦勞。いろいろなインフラの設備ですとか、たまたま小田原市の公園があって、その駐車場の隣接地、溪流が流れているうちの山が隣接していたところが一番いいだろうということで、これはフランスのフライチャイズなので、フランス人の設計者を招聘して、設計もフランス人がやるということです。そのときのやりとりが、お金の面も含めて一番大変だったところです。その中で私の視点としては、日本の自然というものにフランス人たちの知見を入れるというところ。彼らと話すと、代理店も含めてなんですが、先ほど申し上げたように、やめたときには森に戻るだけ、その視点を彼らも非常に強く思っていたということに安心をしたわけですし、それならできるかなと思ったのです。その中で私がこだわった点は、やはり日本の山は日本人の山なので、この会場だけで語弊があることを言うかもしれないですが、たとえばディズニーランドとか、U S J とか、いろいろあるものは、まるまる海外のものを持ってくる。それを日本の自然の中に持ってきて果たしていいのかどうかという葛藤はありました。フランスのものを持ってくるという葛藤はあったのですが、幸いにしてディズニーランドは埋め立て地という全く別の世界でやってくれたからいいのですが、果たして日本の自然の中にそういう外国のものを持ってきていいかどうかということです。

それが彼らの思想の中できちんとしていたことの一方で、私は、車会社にいたことで、外国のものに対する憧れとか、いいものはいいい、技術的なもの、デザイン面、そういったものでうまく調和できるかどうかということで、日本の自然と海外の思想とか、技術、デザイン、そういったものをきちんと入れ込めるかどうかというところが、今回のフォレストアドベンチャーという事業に関しては、日本の山とも親和性がよかったというラッキーな面はありました。

それと、もう一つ、本物を使うという発想ですね。先ほど安全器具の話をしました、そういったものの本物感とか、あと、たとえば園内のサイン一つのデザインとか、センス、そういったものも非常に大事でして、そこにあるものは中途半端にやってはいけない。日本の自然を生かし、日本の自然とわかるような中で、外国の本物というものを取り入れて、それで彼らのセンスで日本に調和するものはやはりいい。そのところを取り入れるという按配がちょっとこだわった点でした。

それから人の面で言いますと、当初、私も自信がなかったというか、フランチャイズか

らの営業委託という形にしました。なので、スタッフも全部営業委託で、人件費も代理店にお支払いをしてということで、最初のメンバーではなかったが、次のメンバーぐらいで鈴木が。アルバイトとしてうちの山にほかの施設からやって来たメンバーか何人かいて、その彼らが非常に優秀で、優秀というのは自然が好きで、それから、今、僕が言っているようなことを非常に早く理解をしてくれたことで、ちょっといろいろ紆余曲折はあったんですが、結果的に彼らをうちの社員にして、彼らも社員として小田原だけでやりたいと。フランチャイズの間はどこに転勤するかわからなかったわけですが、小田原に固定してくれたということです。

長くなってしまいましたので簡単にしますが、実はさっきのプレゼンテーションで一つ、言っていなかった重大なことがあります。この事業をやって一番よかったのは、当初、想定はしていなかったのですが、私が山を継いだときは、先ほど先生からもあったように番頭がいました。うちの番頭というのは3代続けてうちの山にいる老番頭がいて、頭の堅い番頭がほぼ山を全部担当してくれていた。なので、うちの父は学者でいられたし、私はサラリーマンでいられたしというのが代々ですが、その番頭の次の世代がいなくて、どうしようかということが一番頭を悩ませていたところだったのですね。フォレストアドベンチャーをやるに当たってそのところは余り深くというか、目的としてはなかったのですが、結果的には、今、社員が8名おりまして、それからアルバイトがフォレストバイクと両方入ると二十数名おります。ということで、両方入ると約30名弱の人間が山に携わっているということが一番大きな成果になりました。何を言いたいかというと、山の番頭の厳しいおじいさんの元に付いたら多分1か月もたない。それぐらい厳しいし、几帳面なすごい人だったのです。一方で、若い人たちは自分のポジションとしてインストラクターというサービス業のポジションがあり、自然が好きで、いろんなことをやりたいということで、まず番頭の元で見よう見まねで農園作業の手伝い、森林作業の見回りの手伝い等々をやってきて、それをみんなアルバイトも含めてローテーションを組んで、レクリエーションの施設ですから土日は忙しいが、平日はそれほどでもないで、番頭の元でいろいろ学んでもらっている。彼らは新しい技術があつて、パソコンなり何なりで書き残せる、記録が取れる、そういった利点がある。8年ほどかかりましたが、番頭が80を過ぎて、目がだんだん悪くなって、軽自動車が運転できなくなってということで、ちょうどそこでいい形で引退してもらって、今はうちの社員とアルバイトでこなしています。結論からいうと、30人ぐらいの若い人たちを山で雇用ができているということが一番よかったことで

はないかと思っております。

○田中（コーディネーター） ありがとうございます。最初のフランチャイズのフランス側のデザインと、辻村さんがお考えになっていた、ご自分の持っている日本の山への思い、それをお互いに打ち消しあうことなく進められるかというところに関しては、やはりその時にいろんな議論があったわけですね。その後、いろいろ運がよかったというお話があったのですが、2番目の山守の方から若い方々が引き継ぐ形で今の人材が育ったところもラッキーだったとおっしゃって、多分、ラッキーの一言では片づけられないお互いの相互作用があったのかなと思います。その相互作用の受ける側、新しく入ってきて、辻村さんの元で仕事を始められた鈴木さん、その当時のことを思い返して、そのあたりに関してはどのような思いを持っておられたのかも含めて、ちょっと語っていただけますか。

○鈴木（コメンテーター） まさに番頭さんとの戦いは大変でした。毎朝、戦うような方だったのですが、スタッフが本当にアウトドアが好きだということと、本部の方からみんな連れてきてしまったのであれですが、それぞれ、最初は全然草刈りもやっていなかった人たちなんです、草刈りや、チェーンソーを使えるようになって、ハンマーナイフが使えるようになり、木も切れて、整備もできるようになって、農園作業もする。そういうふうにみんながそれぞれ成長してくれたので、その辺は本当によかったかなと。ただ、そこに至るまでは、先ほど言ったように8年くらいかかりましたので、時間がかかったかなと思います。

あと、集客に関しては、フォレストアドベンチャーは、作ればお客さんが来るものではなくて、当時は本当にある一定の利用者数の数字から超えることができなかったですね。それはいろんな原因があり、全国に増えてきたことによって、ブレイクスルーしたところがあって、そこから一気に全国に広まり、今45か所全国にあるのですが、そういった集客が上がったというのもすごくいいことだったと思います。

あとは、フォレストアドベンチャーに最初は専念していたのですが、やはりフォレストアドベンチャーだけではなかなか難しいだろうなということを初期から感じておりましたので、多角経営のはしりとしてバイクをやったりとか、違うことにチャレンジするというところに苦労しました。

○田中（コーディネーター） ありがとうございます。そのあたりについてはまた後で詳しくお聞きしたいところもあるかと思いますが、2番目のパネリスト、葛城さんは委員でもあるので、最後にコメントをいただくことにして、一人飛ばして、平野さんからコメン

トと、ぜひお聞きしたい質問というのをお願いしたいと思います。

○平野（コメンテーター）　ありがとうございます。平野と申します。私は、多分、研究者としての立場からということで今回こちらにお招きいただいたと思うのですが、先ほど田中さんからご紹介がありましたとおり、近年の日本では従来からの森林における物質利用に加えて、様々なレクリエーション、レジャー、スポーツといった新しい森林利用が非常に発展してきていて、その研究をさせていただいていた立場にあります。具体的にはハイキング、登山は従来からありましたが、最近はマウンテンバイク、トレイルランニング、あるいはレジャーとしての個人のキャンプ、あるいはフォレストアドベンチャーを初めとした冒険型パーク、もしくは趣味、スポーツとしてのハンティングといったものが挙げられるかと思います。ただ、こうした森林利用が多様化していくと、やはりどうしても従来の森林所有者の方々や、地域社会の人々を含めて、様々な軋轢が生じてくるわけです。

先ほど辻村さんのご発表の中で「里山のミッション」と掲げられていたとおり、物質供給の場でもあり、かつ地域の方々にとっては水を提供する場が森林であったり、あるいは里山のエネルギーを得ていくという場でもあったわけで、そういった新しいレクリエーション利用の方々が入っていくと、そこで、例えば地域の方々から「勝手なことをしてくれるな」と言われることもあったり、あるいはその土地土地の森林所有者の方から「入ってくれるな」というようなこともありますし、たとえば歩く方と、マウンテンバイク、トレイルランニング、走る方との間には、「走ってもらっては困る。危ない」、逆に「ここはみんなで使いたい」というような軋轢が生じたりもします。なので、その調整が非常に難しくなって、それ自体が私としては非常に興味深い研究テーマで、どうやって調整をうまく生かせるかが一つ考えるべきところだと思います。

その中で辻村さんの取組みは、鈴木さんと一緒に、様々な地域社会の方々と連携を重ねられつつ、たとえばフォレストアドベンチャーや、マウンテンバイクをご自身の所有地でされるに当たって、事故が起こったときの所有者責任というのは当然考えなければいけないポイントだったりするわけですが、そういった幾つかのハードルを一つ一つ乗り越えられて、今日のT-FORESTRYの取組みを実践されてきたということで、まさに私としては先進事例として多くを学ばせていただいたところになります。幾つか本の中で実際に辻村さん、鈴木さんの取組みを紹介させていただいた、そんな位置付けになろうかと思います。

○田中（コーディネーター）　せっかくですから、本のタイトルをお示しいただいた方が

良いかもしれません。

○平野（コメンテーター） 「マウンテンバイカーズ白書」という本で、辻村さん、鈴木さんの取り組まれているフォレストバイクをご紹介させていただいたり、「地域森林管理の長期持続性」という本の中で辻村さんの代々の森林経営から今のT-F O R E S T R Yに至る取組みを紹介させていただいた、そんな位置付けにあります。

それで、質問になりますが、そういった形でこれまで辻村さん、鈴木さんの取組みを伺っていて、今日のお話も伺う中で、改めてポイント、こういった天皇杯というすばらしい賞を受賞されるようになった評価のポイントも二つあるのかなと思っています。

一つは森林への社会ニーズの変化、これを見極める力かなと。私は、本の中ではこれを「順応力」と呼ばせていただいているのですが、絶え間なく変わる森林に対する社会ニーズをズバツと見極められる。ある意味、これまでの利用に拘泥されない、非常に柔軟な姿勢。先ほどフォレストアドベンチャーもほぼ即決で視察に行かれて、それで導入を決められたということで、こういった順応力は、辻村さんご自身、振り返られて、どういったところから養われてこられたのかなというのを伺ってみたいと思います。

もう一つは、持続的に森を育て地域を支えていく姿勢、これは長期軸と呼ばせていただいています、よく辻村さんのご発表の中でも「森を背負ってしまっていますから」というふうな表現で言われるかと思うのですが、代々、小田原で山林を経営されてきたお家に生まれになられて、自分の代でどうしていくかを地域社会も含めて考えていく、そういった姿勢かと思うのです。では、逆にそういった森を背負っていない人間もそうした長い目線で森を育てていく考え方にたどり着き得るのかどうかを、伺ってみたいと思います。例えば私のような小田原市に縁もゆかりもない人間が山林を取得して一旗あげようと思って辻村さんのお隣に山を持ちまして、いろいろやりたいと訪ねて行った場合に、辻村さんは長期軸、長い目線を持って地域社会と森林と関わっていく重要さをどういう形で私に教えてくださいませんか。もしくはそれをどんなふうに期待されるのかなというところを伺えればと思います。

以上、この2点が質問になります。

○田中（コーディネーター） ありがとうございます。なかなか核心をついたというか、厳しい質問というか、でも、是非お答えをお聞きしたいと思いました。

二つご質問があったのですが、最初は順応力ということで、非常にいろんな状況が変わっていく中で、新しい取組を進めていくのは本当に難しいことではないかなと思うのです。

が、そういう力をどのように辻村さんの場合は形成されたのか、あるいはどういうふうに考えてそういう力を発揮されているのかというあたり、まず1番目の質問についてお願いできますか。

○辻村（業績発表者） 改めて一生懸命考えたことがないことですが、一つは、社会ニーズの変化は絶えずあると思います。一番大きく感じるのは、森林というのは、今までともすれば拒む、聖域だから、ここは人が入るべからず、大事な森だからということだったと思うのですが、今、森の価値が世の中でなかなか知られなくなったことと、例えば町で木造の家が建っている、昔僕らが子どもの頃はそこで大工さんがトントンやっていて、町を走る車は木材を運ぶトラックが走っていたり、材木店が其処ここにあったり、そういう時代とは全く違って、今はシートが被され、いつの間にか家ができていて、大工さんが鋸を引いている姿を誰も見ない、子どもたちも見ない、そんな社会のニーズが変化していると思います。

そうすると、森も拒んでいる場合じゃないぞというか、森も人を呼び込まないと。なぜか私が思っていたのは、子どもたちというか、森に来ると、木は温かいとか、揺れるとか、バリバリいうとか、そういうことで、木のその姿が木造の家の柱と結びついていないのではないか。要は木というものも、コンクリートも、煉瓦も、金属も、同じように、東急ハンズとは言わないが、どこかから買ってくる、倉庫から出てくるもの、いわば工業製品に近いとらえ方をされているのではないかと感じております。とにかく山に人を呼び込んで、木育が何だかんだということではないのです。それを一生懸命やることは、それはそれで価値があるが、そういうことよりも、普通は一生のうち一度も木になんか登らないんだから、登ったことがあるということで、木に触った、登ると下がよく見えるなんていうことを一度でも経験すると、脳の片隅に何となくそれがインプットされていて、将来、家を建てる時に、「あのときの木ね」というのが何となく思い起こされればいいなぐらいの意味合いで人を呼び込むということなんです。一生懸命教育をすとか、そういうことではないのですが、そういったことで、とにもかくにも、拒むことから、森に人を入らせていいじゃないと、なぜか思っていました。そういう話がなくて申し訳ありません。

○田中（コーディネーター） 平野さんの一つ目の質問との関連でお聞きしたいのですが（その次の質問にも関わるのですが）、8代目ということであっても、親御さんは家業を「継げ」ということはなく、30年間、自動車会社で好きなお仕事をされてきた中で、やはり実家の山、あるいは育った山のことはずっとつながりがきつとあったのかなと。その中

で養われたものと、全く違う世界での仕事の中で得られたものが、先ほど平野さんのおっしゃっていた順応力みたいなものにつながるのかなと思いながら伺っていたのですが、ご自身でお考えになって、その辺はどうですかね。

○辻村（業績発表者） そうは言っても、小田原には月に1度、忙しいときには3か月に1度ぐらいは父の運転手をしながらみたいなことで行っていたので、子どものときからつながっているんで、そういうことは特に余り意識はしたことはないが、先ほど鈴木君が言っていた厳しい番頭の姿、最後の番頭のもう一つ上の親父さんというのがもっと厳しい親父だったんですね。そういう人がこの山にはいるんだ、その人の苦勞というか、やはり苦勞しているんだろうなというのを、苦勞を知らずに見ていたということはすごく一本の筋としては、山は生はんかなものではなさそうだなということだが、自分ではできないから、こういう後継者もちゃんとしておかなければいけないかなというのも含めてですが、そういったものはありました。

あと、昔は山に対して皆さん方、町の方々ももう少し山を崇めると言うと言い過ぎですが、うちの山がということではなくて、山というものを大切にする、そんなことを見ていたものですから、山の存在感というものをもう少し取り戻したいなという気はしていました。それと、工業製品を扱っていたことと、バリバリのビジネスの世界にいたことで、やはりほっとできる瞬間の山というのはあったんだと思います。

○田中（コーディネーター） なかなか言語化しにくいところなのかなと思いながら聞いていたのですが、平野さん、まず最初の質問についてのご返事を伺って如何ですか。

○平野（コメンテーター） ありがとうございます。お話を伺っていると、辻村さんの中には、どっちかというと、地域で林業、森と関わる方としてのベースが根底におありになって、その中で番頭さんの世代とはまた違う形で、拒むのではなくて、人を入れるというご発想がそこに重なって、今の森林経営に結びついていったというふうに私は伺いました。

○田中（コーディネーター） 続いて、宿命論みたいだったのですが、辻村さんのように8代を背負った人間ではない人たちが、こういう形の取組みをもしやろうとした時にどんなことをお伝えになりますか。

○辻村（業績発表者） 多分、言えることは、自然は強いのですよ。自然は生はんかに弱くないので、よく慮って、森は大切だ、木一本切ってはいけない、たとえばフォレストバイク、自転車がこんな通って、根の上を通るのはけしからんみたいな話があると思うのですが、森というか、自然はそんなにやわではないので、1本、2本切ったって、それでど

うなるものでもない。でも、それが人の役に立つ、動物の役に立つ、鳥の役に立てば、それはそれでいいじゃないというようなことで、まず新たに来られたとすると、森を見る。見るというのは、森はやわじゃないということを見る。その森に対する都会から来られた方の思いというか、イメージ、森とはこうあるべきだとか、木はこうあるべきだ、自然はこうあるべきだとあると思うのですが、人間が考えるよりも自然の包容力の方が強いから、人間がちょっと悪さをしたところで森はびくともしない、だから自由な発想で。ブルドーザーで木を切ってしまうと、ちょっと話が違いますが、土地の開発業者に対する言い方はそんなことはしません、森を森として活用したいという思いで来られた方には以上のような言い方に尽きると思います。

○田中（コーディネーター） 平野さん、よろしいですか。

○平野（コメンテーター） 代々山を背負っていなくても、自然に対する感性があれば、誰でもそういった長期的な視点を持って経営に当たれるというお話かなと、今伺っていて理解させていただきました。

○田中（コーディネーター） 簡単なことではないなと思って伺っていたのですが、ただ、森にはある意味脆弱なところもあるかと思うのですが、強さと両方をきちんと見る目をまず身につけなさいということ、そして固定化した観念ではなく、その森をどんなふうにかかしてやっていけるかということを考えることが、長期的に森を守りつつ生かすことにつながっていくのかなとお伺いしました。

○辻村（業績発表者） ちょっと加えると、うちの山にモミの大木というのが結構あるんですね。それは人工的に植えたのか、ちょっとわからないのですが、うちの山のモミは、不思議なことに150年の間に必ず枯れるんです。120年ぐらい過ぎると、見る見る枯れていく。どの木もそうなので、今の環境だからというのかどうかは別として、それを見ると、人間の役割じゃない話で、これは枯れる。その前に使えるものは使わなければいけない。枯れたものの後の処理よりも、枯れる前の、そろそろ枯れるかもしれないから使ってやろうとか、そういうことを見る目が必要な気がして、何か自然にどうのこうのということ、自然の方が向こうのサイクルでやっていることをこっちが垣間見ているだけだから、今の時点のどこを切り取るかということで考えれば、外から来られた方もいいんだと思います。

○田中（コーディネーター） ありがとうございます。このあたりももっともっとお聞きしたかった、議論したいところもありますが、後ほど皆さんからも関連してご質問とかも受けたいと思います。平野さん、ありがとうございました。

では、続いて、一番向こうにお座りの豊永さんからコメントとご質問をいただければと思います。よろしくお願いします。

○豊永（コメンテーター） 神奈川県豊永です。私は神奈川県西部地域を担当する林業普及指導員として、株式会社T-FORESTRY様の天皇杯受賞まで関わらせていただきました。神奈川県からの林産部門での天皇杯受賞は初めての快挙でありまして、改めてお祝い申し上げます。

田中先生のスライドにもありましたが、T-FORESTRY様は天皇杯受賞とほぼ時を同じくして自然共生サイトの認定、国土交通省自転車活用推進功労者表彰などを受けておられまして、その最後の集大成が天皇杯受賞となりました。こういった時期にT-FORESTRY代表者の辻村様の森林経営に対する思いを伺う機会を得られたことは私自身にとっても大きな糧となりました。

関わらせていただく中で二つ印象に残ったことがありますので、お話しさせていただこうと思います。

森林空間サービス産業等の様々な取組みで資金を得て、その資力を森林管理に回すことにより、林業経営を維持しながら後世に美しい森林を引き継ぐところが一つ目の印象に残ったところです。現在、所有森林では長伐期施業を実施されて、間伐を中心に整備されていらっしゃると思いますが、軸を林業において森林経営を進めていらっしゃるところに、日ごろ森林、林業に関わる人間としては大変心強い思いを抱きました。

二つ目ですが、先ほど辻村さんのご発言にもありますが、森林内で作業を行う場合は、関係者以外の方に林内に立ち入ることは歓迎されないことが多いと思いますが、発想を転換され、所有林を開放してフォレストアドベンチャー、フォレストバイク、ハンターバンクといった多くの人を呼ぶ仕組みを仕掛けて、森林への入り口を広げられた。今ほど森林空間サービス産業が認知されていないときに、こうした取組に着手し、成果を挙げられた森林所有者さんが神奈川にいらっしゃることをうれしく思いました。

ここで、T-FORESTRYさんが所在する小田原市のPRも兼ねて紹介させていただこうと思います。少しご紹介がありましたが、小田原市は山、里、海が1行政区域でつながる風光明媚な都市です。城下町であり、東海道五十三次の宿場の一つで、旅のお土産にということで寄木細工や漆器などの木材を使った工芸産業も古くから盛んでありまして、市全体で森林、林業、木材産業を盛り上げようという機運があります。代表の辻村さんは小田原市内の森林、木材産業関係者とも連携されて事業を進められておりまして、所有森

林に隣接してキャンプ場や公園がありまして、一帯は林野庁の森林サービス産業推進区域として指定されています。また、市のおだわら環境志民ネットワークの代表を辻村さんが務められるなど、地域社会にも大きな貢献をされていまして、地域でもなくてはならない存在でいらっしゃると思います。小田原は新幹線も停車する交通便利な場所ですので、ぜひ皆様にも訪れていただきまして、株式会社T-F O R E S S T R Y、辻村農園山林の森林、神奈川の森林を見ていただければと思います。

では、質問を。天皇杯を受賞されてから、よりたくさんの方の視察や研修を受け入れていらっしゃるかと聞いております。最近、企業による社員研修や福利厚生のか場として森林空間が注目されると聞きますが、そういった受け入れをされた企業や社員の反応をお伺いできればと思います。また、それにあわせて、新たなプログラムなども検討されていれば、支障のない範囲でお伺いできればと思います。よろしくお願いします。

○辻村（業績発表者） ありがとうございます。PRもいただき、ありがとうございます。視察というのは、今回の受賞の前からいろいろとなるべく受け入れるようにしてございまして、公的には小田原市民学校という市民の方たちの学校の講師役みたいなことで、座学と山の案内を年に2回やったりとか、あと、企業、特にサービス産業になってからは、地方自治体の方等々、結構な頻度でお見えになっています。その方々の反応は、さっきのフレーズの中にありました「木の値段は幾らだと思ふ」というところが皆さん一番びっくりする、逆に皆さんが知らないことに私の方が愕然とするところですが、それぐらい、言ってみれば、山持ちは金持ちだという昔ながらの妄想が今も脈々と生きていて、それは本当に妄想ですからという説明に疲れるのがいつもの視察のパターンです。おかげ様で、やることによって、どれぐらい伝わるかはわかりませんが、森の大切さ。あと、よくお話しするのは、いわゆる木の上に雨が降って、ちゃんと太陽が照る、間伐をしてある、太陽の光が見えるでしょう、そこに草が生えるんですよ、草が樹木から落ちる大きな玉粒の雨をやさしく受け止めて、それが地面に吸い込まれて、治水のためにいいんですよ、そういうお話をするのはわりと素直に現場だとわかっていただけることで、そういう効果はあると自負をしております。

ただ、疲れます。というのは、ボランティアなのですね。ほぼほぼ、100%に近くボランティア。ディズニーランドには1万円払って、山で2時間半いてタダというので忸怩たるものもあるし、あるとき、心が折れた瞬間がありまして、良かれと思って、皆様方を案内していたら、後ろの方からある方に「聞こえねえぞ」と言われて、こっちは一生懸命タ

ダ働きをして、皆さんにうちの地所を説明しているのに、この方は単なる来てやった風で、しょうがなく聞いていて「聞こえないぞ」と言うのかと、心が折れた瞬間があったくらいです。実はちょっとこの頃潮目が変わってきて、いろいろな企業ですとか、いろいろなところが、そういったものに対して対価を払うというか、要はフォレストアドベンチャーで4,000円いただく、フォレストバイクも4,000円いただく、そういうことはやりたくないが、自然を歩きたいという、同じ社員旅行でもそういうグループが出てきたということが去年ぐらいからあったので、それを誘致している鈴木の方から。

○鈴木（コメンテーター） コロナ後、アウトドアブームがあった頃からすごく増えてきてまして、全国的にいろんな市区町村、県も含めて来られまして、特にそのときはマウンテンバイクとはどういうものなのかという視察が多かったんですが、その後、大分、会社関係が多くなりました。辻村さん、2時間半と言いましたが、3時間近く一緒に歩いて、すごく事細かに説明をするのですね。なので、これは一種のエンターテインメントだと僕は思っていたので、お金はきっちりいただこうと思うようになりました。先ほど言っていた賞を受賞する前と後の変化は、まだそこまでないのですが、前は視察が受け身だったんですね。話を聞きに来るとか、たまたま来たいみたいなのが来たのですが、今はすごく能動的に自分からいろんな質問を投げかけてきたり、やはり同じようなことをしたいという方だったり、企業として違う考え方を持とうとしている方とか、そういう方たちが、受け身ではなくて、自分たちからいろいろ攻めの姿勢で聞いてくるというか、そういう視察が増えてきたので、これはいいことかなと思ひまして、辻村さんの解説が第1弾、次は森林浴を含めた違った山のガイド、こういったものをやっていこうかなと考えています。

○田中（コーディネーター） 豊永さん、よろしいですか。もし何かあれば。

○豊永（コメンテーター） ありがとうございます。

○田中（コーディネーター） ありがとうございます。本当に森をどんな形で活用できるか、フォレストバイク、あるいはフォレストアドベンチャーでこれだけの人来てもらう中で、今日のプレゼンの中でも話がありましたが、いろいろな財産を持っておられますよね。たとえば藩政時代、江戸期に植えたような針葉樹もあれば、天然生のかかなり大きな樹木がいろいろ生育するような自然性の高い林もありますし、過去に作られた水力発電の遺構であるとか、先ほどフォレストバイク、フォレストアドベンチャーを楽しめない方にもそういうコースがあると。そういう人たちにもさらに森の魅力を知ってもらう、そういう方向性で、それがきちんとビジネスにつながる、大きなビジネスではないかもしれないが、

全部ボランティアなものではない形でつながってくると、本当にいいなと思います。実際、そういうことにつなげていきたいとも辻村さんはおっしゃっていたので、是非、それがいい形になればいいなと思ってお聞きしていました。ありがとうございます。

それでは、最後、トリになりますが、葛城さんからコメントとご質問をお願いします。

○葛城（コメンテーター） 私は去年の8月7日に田中主査らとともに現場視察でお邪魔させていただきました。小田原からバスに乗って、その名も「辻村植物公園」というバス停で降りると、もう目の前が視察地だったのですね。まずそれに驚きました。公共交通機関だけで行ける森なんだと。これは多分経営的にも非常にメリットなんじゃないかなと思いました。その場でお会いしたのがお二方であり、関係者の方だったのですが、まず、辻村さん、鈴木さんにお目にかかって、正直、林業っぽくないなと思ったのですね。これまでいろんな林業関係者の方とお会いしてきましたが、何か臭いが違うなというか、誤解を省みずに言いますと、垢抜けていらっしゃって、余り土の臭いがしない感じが第一印象としてありました。それがいいとか悪いとかという意味ではなくて、単なる印象です。

今日のお話をいろいろ伺って、私の中で謎が解けたことがあったのですが、それは後回しにさせていただいて、視察のときに印象に残ったことをまずお話しさせていただきます。辻村さんが「我が社には四つのミッションがある」という話を最初にしてくださいました。一つ目が、一丁目一番地の林業経営をしっかりと行うこと。そこを聞いたのも私としてはとてもうれしかったです。やはりフォレストアドベンチャーとか、フォレストバイクとか、そちらのほうが華やかなので目につくのですが、大前提として一丁目一番地の林業経営をしっかりとやるんだということを掲げていらっしゃるところもすばらしいなと思いました。

二つ目にエネルギーの創出ということを挙げられました。東日本大震災のときには計画停電がありまして、小田原市は蒲鉾工場を初めとして大打撃を受けたそうです。そんな苦い経験からエネルギーを自給しなければということで、先ほど田中主査からもありましたが、おじいさんの代から水力発電所をやっていたということで、それを復活させてくださいという要望が地元からあったんだそうです。復活させるべく、いろいろ試してはみたが、それは難しいということが判明して、遊休地にメガソーラーを設置したと。実は私に限らず現場に視察に行った委員の数名は、メガソーラーを設置されているということが、正直言うと、ちょっと引っかかっていたんです。今、日本各地で問題になっていますが、森林を切り開いて、緑を奪って、太陽光発電をするのは本当に自然にやさしいことなのという疑問を持っていた中で、そこが正直ちょっと引っかかっていたのですが、その経緯を聞き

ましたところ、森をつぶしてメガソーラーを作ったわけではなくて、材価が低迷したお父さんの時代に建設残土を受け入れて埋め立てをしていた深い谷だったところ、その埋め立てが完了して、その上に植樹をする予定だったが、東日本大震災が発生したので、そういう経緯を経て、ソーラーパネルを設置したと。設置に当たっては神奈川県の高い基準をちゃんと遵守して、浸透升を最初に設置する。お隣の静岡県は最後でいいのだそうですね。だから、数年前に熱海で大規模な土石流がありましたが、そんなことが起こらないようにちゃんと高い基準が設けられているのをクリアして設置したと。管理のしやすさよりも、生態系を優先的に考えて、パネルの下及び周囲も草地にしている。現在、7メガ、600世帯分の電力を生み出して、拡大は考えていないというご説明を受けまして、これは全くマイナス要因にならないなと思いました。

話を戻しまして、四つのミッションのうちの三つ目に生態系の保全を挙げられました。竹林へのイノシシの害とか、その他、林産物へのシカの害を食い止めるべく、ハンターバンクへの協力などを行っている。現在、登録者が170名ほどいて、これは猟場のない都会のハンターのニーズと、獣害に悩む地元の悩みの解決、双方に資するウィン・ウィンの関係だなと思いました。また、フォレストバイクのコースの設置によって、シカとか、イノシシをソフトに追い出す効果もあることが実体験として判明している。今年からすると、一昨年からはキツネが戻り、ムササビもいる。自分が会長を務めている小田原環境志民ネットワークを初め、環境活動のプラットフォームになることを目指している。単なるボランティアでは継続しないため、きちんと対価を得て事業を回しているというご説明にも深く感銘を受けました。私自身も林業を応援する仕事を20年ぐらいやらせていただいていた中で、全国の林業者がシカの害に悲鳴を上げている姿を見て、10年ほど前にハンターになりました。私は銃猟と罠、両方の免許を取ったのですが、今、実際に東京都の桧原村で巻狩をしています、罠の方は一切使えていないんですね。やはり都心に住んでいますと、罠を設置する場所ありませんし、仮にどこかに設置させてもらったとしても、見回りに行くのにすごく手間がかかってしまうので、やはり実際的には使えないということがありました。そんな中、もし私に猟場がなければ、これは是非使わせていただきたいなと思えるようなことを実現してくださっていたので、そういう意味でもありがたく思いました。

辻村さんが掲げた四つ目のミッションは余暇の提供でした。立ち入ることができない神聖な場所として森林を扱うのではなく、人が立ち入ることによって自然と共生することを目指している。その一環としてフォレストアドベンチャーを2010年に開設、設備の設置に

関しては事業をやめれば元の森林に戻るように配慮している。また、隣接地には枯死木等を熱源として活用したテントサウナ3張りも設置ということで、さっきもちらっとお話がありました。このフォレストアドベンチャーには、私、その後、今年になってからプライベートで遊びに行かせていただきました。とても気持ちがよくて、特にやはり樹齢300年を超える木があっちにもこっちにも立っている中にジップラインが張られていて、そんな夢のような空間で、しかも地面から大分高いところを移動できるというのはとても気持ちがよかったですし、何より感銘を受けたのは、今日のお話にも出てきましたが、もしフォレストアドベンチャーをやめたとしたら、元の森に戻せるように、ちゃんと太い木などにもクッション材を巻いて、ロープなどが食い込んだりしないようにしっかり対処していることでした。あと、安全管理もすごく万全を期しておられて、これだったら、よっぽどのがない限り事故は起こらないだろうなと思える環境でありました。

全体として、若い社員の方が生き生きと働いていらっしゃる姿がとても印象に残りました。今日のお話にもありましたが、ローテーションでいろんな現場をそれぞれが回ってやっていたらということ、視察時にお会いした方々も、その後、プライベートで行ったときにお会いしたスタッフの方々も、本当にハツラツと仕事をしておられて、林業の現場でこういう場所もあるのだと。もちろんハツラツと働いていらっしゃる現場があることは承知していますが、今まで見たのとは全く違うような空間の中で、そういった若い方々の姿を見られたことにとっても将来性を感じて、私としては、天皇杯はここしかないなと思わせていただきました。ありがとうございました。

質問ですね。さっき、今日、謎が解けたと申し上げたのですが、余り林業っぽくない雰囲気漂わせていらっしゃる方々であるにもかかわらず、視察の際に、山に入ったときに最初に案内してくださったのが山の神様の祠だったのです。私、そこにも大変感銘を受けまして、そんなに大きくはない祠ですが、ちゃんと大切に守り続けてきてくださったんだということがとてもよく伝わってくる空気感でした。今日、ここで辻村さんから、日本の自然にフランス人の思想や視点を入れるということについてお話がありましたが、ディズニーランドのような形ではなくて、自然と親和性のある形で調和できるようにとおっしゃったことが、私の中で、だからこういう山だったのだとストンと腑に落ちたんですね。あわせて、その後、生きている木、生えている木と、家の柱とが、若い人、子どもたちの中で結びついていないんじゃないか、そこを結びつきたいというお話にもとても感銘を受けました。よく切り身の魚しか食べたことがない子どもは、海でも魚が切り身で泳いでい

と思っていると言われたりしますが、それに近いことが実は木でもあったのかなと。それが木造住宅離れの一因になっていたのかなんてことを思ったのですが、そういった日本の自然とか、伝統的な価値観を大切にしようと辻村さんがそもそも思われているのはどういった思いが底辺にあってのことなのでしょう。

○辻村（業績発表者） 自然過ぎてしまって、パッと思い浮かばないのですが、森の風景、さっき私はよく林業のことがわからないから、「きれいな森にしておきたい。美しい森にしておきたい」、彼らにもそれしか言わないのですよ。指示しなくても、スタッフはいつの間にか草刈りをしてくれて、邪魔な枝は取って、危ない枝は取ってくれてとか、そういう視点が私の視点なものですから、そういう視点でうちの山というか、日本の山を見ているというのが、お答えになっていないのですが、それが日本人であることなんだと思うという、それしかないのです。たとえば先ほど言っていた山の神様というのが、お正月と5月と9月17日にお祭りをするので、今でもお魚、野菜、果物、お菓子、お酒と、昔はその日が無礼講で、その日は飲めや歌えだったらしいのですが、今はすぐ仕事に戻れになってしまうのですが、そういうことも含めて、無信心論者で、精神性ということではないのですが、自然における見た目のきれいさと、そこに張りつめている空気、そういったものが不思議と調和をする。120年たつと枯れる木は枯れるとか、そういうものなのだと思います。全然お答えにはなっていないのですが。

もう一つおもしろいのですが、二宮神社の鳥居材という話をさっきしたのですが、それは神社ですから、ちゃんと宮司さんが皆さんを集めて礼儀式をして、それから伐採に入りますが、宮司さんが山の神様を大きな声で呼ぶ、声を止めた瞬間に上の方で鳥がピーと鳴く。またすごいタイミングで鳴くのですよ。本当に山って何かあるよねという精神。それからもう一つは、あるとき、300年の柱材を倒すときに、大きな2本の木があるところの間というか、2本あって、それにかかってしまうと、300年の木が割れたり、折れたり大変だからと、離れたところに倒そうと思ったら、ちょっと下に「うろ」が入っていたものですから、思ったよりも微妙に倒れる位置がずれて、一番やってほしくないなと思った木の方向に向かって倒れたのですね。みんな固唾を飲んで見て、あっと思ったら、この木がひねりを入れて、この2本の木の間にはスポンと。ひねらないと、そこには入らないのです。自然にひねりを入れてスポンと入った。実はそこに入ったほうが引き出すには一番都合がよかったというおまけがついたのですが、それを見ている山の人間は皆、やはり神の手というものがあると。だから、そういうのは偶然でしょう。何もかも、仕組まれたわけ

でもないし、神様がいるわけでもないと思うのだが、それができてくるのが山のおもしろさだし、不思議さ。鳥がここで鳴いちゃおうかと思う瞬間だったり、そういうものの不思議さを子どもの頃から体験しているということなんだと思います。

○葛城（コメンテーター） すてきな話をありがとうございました。

○田中（コーディネーター） どうもありがとうございました。今日、会場にいらしている方も山で仕事をされている方が多いので、何となく共感する部分というか、同じような気持ちを持たれる瞬間がいっぱいあるなという気がします。私は研究者なので、それほどの濃度ではないかもしれませんが、同じように感じるころがありました。ありがとうございます。今日のお話の中で、辻村さんのプレゼンの中でも「美しい森」という言葉が出てきて、やはりその気持ちがいろんな仕事に全部つながっているのかなというのが、今のお話を伺いつつ、また思い出されました。ありがとうございます。

私のつたない運営でどんどん時間が押してしまいましたが、会場の方のご質問を受けたいと思います。もっと時間に余裕があるつもりでいたので、質問してくださいねとお願いしている方が実はいらっしゃいますので、お待たせしましたが、まず会場の方から、お願いした方に簡単にご質問、コメントをいただきたいと思います。自然保護協会の土屋先生にコメントいただければと思います。

○会場（土屋） 実は、ちょっと振るかもしれないからねと言われていたので考えていたのですが、所属は日本自然保護協会の土屋と申します。前は東京農工大学にいました。多分、田中さんが私に声を掛けていただいたのは、昔から森林レクリエーション関係はずっとやっていて、あと、登山もやっていたのですね。登山関係の研究もやっていました。実は辻村さんたちにお会いするちょっと前に平野さんから声をいただく前は、一応、中間である森林サービス産業についてはほとんど勉強していなくて、もう7年ぐらいになりますか、森林サービス産業のことを勉強しだしてからは何回も辻村さんのところにお邪魔して、かつマウンテンバイクとか、フォレストアドベンチャーを楽しみながら、鈴木さんなんかともお話ししながら、いろいろ勉強させてもらった者です。なので、今日、いろいろお話を伺って、ある意味でいうと、これまで伺ったことの部分もあるのですが、改めていろいろなことを考えて勉強になりました。

実は三つ感想を言おうと思ったのですが、美しい森を作るというお話は皆さんもされていて、私も一番初めに伺ったときに、美しい森を作ると言われて、一応、林学の人間なもので、森林美学というのがあることはあるわけですが、そのとき、一瞬何をおっしゃるん

だろうかと思ったのです。ただし、それから辻村さんと半日ぐらいかけて森の中を一緒に歩かせていただいて、こういう一つの言語化の仕方もあるんじゃないかなと思って、それからはずごくその言葉が気に入りました。ただし、これはもうお話があったので、余り言いません。

あと二つですが、一つはやはり天皇杯を受賞され、まずはおめでとうございます。それより3年ぐらい前からお付き合いしているもので、その頃に伺ったときにやっていたアクティビティより、今、だいぶ増えているのですよね。それは鈴木さんがおっしゃったみたいに、なるべく新しいことにどんどん挑戦していくということをおっしゃっていて、それをまさに実現しているところだと思うのです。段々、我々研究者の方が、森林サービス産業という中に入れていっているところから、平野さんの的にも多分入っていると思いますが、だんだん複合産業化していったら、そのうち、これは我々のいわゆる森林サービス産業括弧付きが外れることもあるのだろうなと。でも、それは多分すごくいいことであって、つまり森林の持っている様々な機能を全部ある意味で言うとうまく使って価値化しようと思ったら、恐らくサービス産業の範疇を超えてしまうわけで、それはすごくいい方向性だなと思っていて、もっと我々を驚かすようなチャレンジをしていただければすごくうれしいなと思いました。

あともう1点。これも今日出ている視点なのであれですが、人を育てられているということが私は非常に重要だと思っていて、鈴木さんだけではなく、スタッフの方を見ていると、皆さん、我々が何か話しかけると、ちゃんとその人の考えをこちらの目を見ながらお話ししてくださる。こういう若い方というのは意外といないので、ちゃんと育ててくださっているというのは、私は非常にいいことだなと思っています。

質問をしなければいけないので、質問です。1点、まじまじとテーマを見てみたら、「都市近郊」というのが入っているのですが、今日は余り出てこなかったなと思っていて、それについてちょっと質問したいのですが、都市近郊であるということは、恐らくプラス面とマイナス面と両方あると思うのです。たとえばオーバーユースの問題とか、土地の価格の問題、税金の問題もあります。先ほど平野さんが言われたような近隣の住民の方々の問題もあると思う。でも、片一方で集客面ではいろんな意味がある。そうすると、都市近郊でこういった森林経営をしていくことのプラマイは結局どうだろうかというのを、辻村さんなりに総括いただけるとありがたいなということが1点。

もう1点は、さっき言った3番目と関わるのですが、何も森林サービス産業に関わらず、

これからの若い担い手を、様々な場所から、地域内だけではなくて、育てていくことがすごく大事だと思うのですが、たとえば鈴木さんの視点で見ると、そういう人材はたくさんいるのか。我々がわからないだけで。それとも、それはこちらの迎え方が悪いただけであって、だとすると、それはある意味で安心できることですが、そもそも鈴木さんの仲間のような人たちというのは世の中にかなり少ないのだろうか、どうなんだろうかというのは、お立場としてどうお考えなのか。それが2点目です。

○田中（コーディネーター）　ありがとうございます。とてもよい質問を有難うございます。私も、ぜひお聞きしたいなと思いました。最初の質問は辻村さんから、二つ目の質問は鈴木さんからお答えいただければと思います。

○辻村（業績発表者）　都市近郊というのは、メリット8割だと思っております。特に新幹線の通るところから車で10分という地の利、東京から車で1時間で来られる地の利は大きいと思っております。ただ一方で、さっき先生がおっしゃったように、税金とか、都市近郊は他の山に比べると高い固定資産税を取られます。そういったことをどこかの役所が気づいちゃったりして、昔、同じようなことがあって、私の父が非常に苦労したのは、バブルの前、都市近郊林の相続評価額がすごく上がってしまって、そのときにうちの親父が死んでいたら山は持ちきれなかっただろうと思うし、逆に国は、それだけの面積があったらゴルフ場になると思っていたのですよ。千葉県なんか、目論見どおり皆ゴルフ場になったんだと思うのです。そういう世の中にしてはいけないなと思うので、こういう話も有頂天にしている話では全然なくて、山側の話をするようにしています。エンターテインメント側の話をすると、国のほうも飛びつきやすいのではないかなと思っていますので、本当に私の姿勢としては、とにかく山の活性化よりも、山を山として、森林を森林として次に送っていく手段だと思っているので、これをエンターテインメントの目的にするつもりは実は全くありません。そこが、今、8割と言ったが、2割が増えないことを切に望むということでお答えにしたいと思います。

○田中（コーディネーター）　ありがとうございます。では、二つ目の質問についてお願いします。

○鈴木（コメンテーター）　雇用に関してはやはりちょっと難しい部分がありまして、アイデアマンの人というのはなかなかいなかったり、若い人でも活発に活動できる人は実際いないのが本当のところ、小田原はリゾートではないのですよね。箱根まで行くとリゾートですが、リゾートバイトみたいな感覚で来る人も少ない。なので、アルバイトにして

も、社員にしても、そういった人を雇うのはなかなか難しいですね。ただ、うちの工夫としては、たとえばマウンテンバイクのスタッフ、彼らはみんな別の仕事を持っています。週末だけこの仕事をするとか、そういったことをうまく組み合わせていくことによって、その人の趣味と実益を兼ねたもの、そういったことができるので、せっかくマウンテンバイクのインストラクター免許を持っているのに使う人なんて日本全国にいないのですよ。その人たちをうまく生かして、うちで働いてもらって、週末にお金を稼いでいただいたり、あと、他の分野でも、テントサウナのスペシャリストがいて、そういう人たちと組んでやったり、そういったちょっと尖った人たちを、趣味と実益を兼ねて、さらにおもしろさというのを感じてもらいながら働いてもらっているのも、恐らく土屋さんからは生き生きして見えたんじゃないかと思います。

○田中（コーディネーター） 土屋さん、ありがとうございました。時間が予定の4時になってしまったのですが、会場の方からよければ一、二問お受けしたいと思います。この際、是非にという方がいらしたら挙手をしていただければと思うのですが、いかがでしょうか。

○会場 非常に貴重なお話をありがとうございました。今日、岐阜県から参加させていただきましたが、岐阜県でもフォレストアドベンチャーみたいなものを検討していた時期はあるのですが、たとえば森の中で機材とかをつける上で、木1本1本とかのチェック、そういったものはどのような形でやられているのか。また岐阜県はどうしても冬に雪があつて、夏場でしか活動ができないという面がある中で、そういった中で取り入れていくような方法といますか、そういったものがもしありましたら、アドバイスをいただけたらと思います。

○辻村（業績発表者） 最初のお話ですが、最初、作るに当たっては、冒頭申し上げましたように、フランスのものなので、フランス人が視察、設計をしに来ます。彼らは非常に木のことをわかっているのもので、そこで選木をする。流石だなと。もちろん日本側にもスタッフがそろっているということで、いかに木を切らないで、でもいい木を使ってやるということは、流石プロというところに任せております。ただ、されども、自分の山です。皆さんのお山ですので、結構、こちらの意見も言いつつ、レイアウトを進めることで、箸にも棒にもかからない山があるのかもしれないが、日本の山で言うとなんかそうじゃないと思うので、それはできると思いますし、可能だと思います。もう一つ、やっている中では、やはり私のところでも10年目、リニューアルということで、木の付け換えとか、そういう

ことをしたり、それから途中で支障木が出てきたり、うちの施設はわりとないのですが、他の施設では木がかかってきたりとか、そういうこともあるようで、そのメンテナンスは常にそれなりの目を持つ人間がフランチャイズにもいるし、日頃のパトロールでもやっていく、それは必ずやらなければいけないけれども、日本の森のポテンシャルは全体として悪くないがゆえに、今40か所ぐらい増えているのはそういうことだと思います。

○鈴木（コメンテーター） 日々のデイリーチェックは必ずやっております。もちろん素人ではあるのですが、社員たち、アルバイト、皆さん、毎日木を見ているので、その変化にはすごく敏感なんですね。なので、実際に枯れてきている木をアルバイトが見つけたということとはよくあるのです。そういった目を育てるのはかなり厳しくやっていますし、あとはマニュアルがフォレストアドベンチャーにはあります。それから樹木医もグループの中にいたりして、詳しく調べたければそういうことをやっています。

先ほどの冬の営業ですが、冬の営業は確かにどこも困っていて、雪が降る地域のフォレストアドベンチャーはかなり苦勞されているのですが、北海道に関しては逆に雪の中でやる、もうそこまで振り切ってしまっています。スノーアクティビティとしての可能性というのも実はあって、雪の中で滑る。スキーとか、スノボではなく、フォレストアドベンチャーで滑るという新しいやり方をやっていて、安全性には問題はありませんので、そういうことも今試みています。

○田中（コーディネーター） 岐阜への展開が見えてきましたでしょうか。ありがとうございます。

もう1問もしあれば、ご質問をお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいですか。「美しい森」という言葉をお聞きすると、速水さんにも何か一言言ってもらいたいと思ったのですが、いかがでしょうか。

○会場（速水） 大変興味深いお話で、僕は面倒くさくて余りここに来ないのですが、今回はお伺いしたいなと思ってやってきたのです。大変楽しい話でありがとうございました。企業の見学とか、そういう人たち、うちも多いですね、年に2,000人ぐらい来て、夫々の従業員は仕事が決まっていますから、暇なのは僕だけなので、僕が案内することになるのですが、なかなか親父の代からお金を取れなくて、昔から思っているのですが、林業界って情報が只なんだなと思っているなという思いがずっとしていて、取れるところから取ったりしていて、最近はずの次女が企業をいっぱい誘致するので、お金が取れるようになってきたのですが、そういう企業とも連携をしながらお金を有効に取っていくのは大変

おもしろいというか、今後考えなければいけないなと思っています。私のところは長伐期をやってきて、今、きれいな森、説明の要らない美しい森を作りたいという思いがずっとあって、林業なんて、一回一回説明してられないですから、見て美しい、あるいは感じて美しいという森を作りたい。そこで収益を上げたい。伐木も80年から100年、あるいは120年ぐらいで回すのですが、80年以上じゃないと、なかなか採算が合わないみたいなことで、ずっと木材販売だけに勝負をかけてきたのですが、近年はそうもいかないなということで、Jークレジットを取ってみたりとか、あるいはホテルを建てたい人がいたら相談に乗ってみたりとか、そんなことをやっているのです。

一番最近おもしろいと思うのは、オーストリアなどで林道の整備をすごくきっちりやられているんですね。いろいろ調べてみると、森林利用というものが林業に限っていないことが、作った林道の整備にお金が入る一つの大きな原因だと言われています。日本はそういうことが全然言われていなくて、今の議論でも、森林サービスだけがレジャーだとか、アクティビティが楽しいという話ですが、それが森林とどう連携するのかというのは、多分、辻村さんは何度か発言されたのでそう思っていらっしゃるのですが、世の中はそれがかまくま回っていない。特に林野庁なんかは余り考えていないですから。固まっている人たちばかりですからね。今日は鈴木さんとか、皆さん、そういう方がいらっしゃるから、辻村さんもそういう発想でお考えなのだろうが、何か森林のアクティビティ、あるいはサービス、企業との連携みたいなものが、本来の木材生産だとか、林道の整備とどうつなげられるかということを、平野さんあたりがしっかりと研究してもらわないと、アクティビティだけを特化して議論しても、今の日本の林業は厳しい。田舎に行けば行くほどそういうことができないから。その辺を研究者も林野庁ももっとまじめにやってもらいたいという気がします。これは意見です。以上です。

山林会も頑張ってやってもらわないと困る。

○田中（コーディネーター） 何か各所で胸にグサグサきている方が・・・。

○会場（速水） 皆拍手をしてくれなければいけないんだけどね。ここで拍手が出ないのがやばい。

○田中（コーディネーター） ありがとうございます。ちなみに私、グサグサきつつも、心の中では拍手を送っておりましたので。いろんなキーワード、大事なことを、最後に速水さんからいただきました。まさかこんないいことを言ってくださるとは思わなかったなと言ったら怒られますが、とても大切なことを最後に伝えていただけたと思います。でも、

今お話しいただいたこと、辻村さんのT-FOREST RYの森林経営活動はまさにそういうことを目的として行われていると思いました。ただ、やはり平野さんが言った長期軸というところでは、長い長い先にどこに着地できるか、誰にも見えないわけですよね。そんな中で、撤退戦ではなく、今の問題にいろんな形での活用を考えながら、よりよい森を、森林を将来につなげていく、それを進めていければ、とてもよい展望をT-FOREST RYの活動はを見せてくれているのかなと思いました。どうもありがとうございます。

つたない運営で時間が10分延びてしまいました。最後に私が締めても仕方がないので、最後、一言、辻村さんから今日の会を受けてのご感想、これからの思いとか、簡単にお伝えいただければと思います。

○辻村（業績発表者） 皆様、今日は貴重なお時間を使ってお頂きましてありがとうございました。本当に素人くさいところからやっている林業家でございますので、お役に立てることが少しでもあれば幸いです。

最後に、せっかく天皇杯を頂戴いたしましたということで、1月29日に皇居に伺いまして、天皇皇后両陛下に直接業績をご説明する機会を与えていただきました。その中で、「今、ご苦労されている点は何ですか」とか、いろんなご質問等々もございましたが、まず宮殿に入ったときに、宮殿の天井材ですとか、壁材が、それはそれは見事な、あれはすべて国産材であろうと信じておりますが、当然だと思うのですが、それが素晴らしいということに私は感動しまして、陛下に私の先代、先人たちは、こういう木を作るために、一番最高が宮殿ですが、こういうところで、節のない、美しい木をつくるために、枝打ちとか、努力をしていたということで、私もこういうものをやる、そういう伝統を受け継いでいきたいというお話をさせていただいたんですが、そのときに両陛下が宮殿の壁をご覧になって、「ほう」という感じで、初めてご自分の家の木がこんなにいいものを使っているのだとお気づきになったのではないかと。それだけは来た功績があったのかなと思いました。ことほどさように、最後にお答えしたのですが、今回はとにかく山というものから発想しているものです。とにかく山をよくする、次の世代に美しい森にして届けるというか、残すというか、送るということ。先ほど申し上げたように、うちの父から、ああせい、こうせいとは一つも言われなかったということなので、私も息子に、山をああせい、こうせいなんて、その先はわかりませんから、言わずに死んじゃおうと思っていますが、でも、彼は彼なりにそういう目で次の世代のことをやるのだらうと思います。そんなことで、今、自然の脅威とか、世の中、トランプの影響とか、もろもろありますが、ある意味、我々は

かわしたり、いなしたり、大自然のものに対してうまくやっていくことが100年、200年、300年という森を残し、使い、また植えて育てるということができないかと思っておりますので、本当に繰り返しますが、サービス産業というか、エンターテインメントというのは手段です。手段ですが、これが一つの役割として、よりお金を稼ぐとか、お金が残って、木が売れば一番いいのですが、なかなかそれがうまくいくまでの間をつなぐものとしては役に立つし、新しい山の価値観ということも世の中の方が気づいてくださるだろうし、最後には、山に行ったら木というものがあって、木を使うとちょっと心地いい空間ができるなといって木造の家が増えてくればいいなというような、本当に山側の意味で、そういった意味で私は林業経営というよりも、山林経営者、森林経営者として何とかあがいていきたいと思っておりますので、引き続きよろしくお願いいたします。本当にありがとうございました。（拍手）

○田中（コーディネーター） 辻村さん、鈴木さん、どうもありがとうございました。また、登壇していただいた皆さん、どうもありがとうございました。会場の皆さんも、時間が超過してしまいましたが、温かく、熱心に聞いていただいて本当に感謝しております。今日はお疲れさまでした。以上でパネルディスカッションは終了いたします。では、お返しします。

○司会 ありがとうございました。主査からすでにご挨拶していただきましたので、私からは重ねて申し上げることはございませんが、会場からも貴重な意見をいただきましてありがとうございました。それでは、これにて優秀農林水産業者に係るシンポジウムを終了いたします。どうもありがとうございました。（拍手）

なお、お帰りの際には、簡単なアンケート用紙を用意しておりますので、ご記入の上、受付にお渡しいただければと思います。また、オンライン参加の皆様方は、ズーム会議から退室いたしますと、アンケートに回答する画面に切り替わりますので、ご回答をいただくように重ねてお願いいたします。

本日はどうもありがとうございました。

（閉会）

令和7年度（第64回）農林水産祭
（第40回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」
（森林サービス産業の推進による都市近郊での新たな林業経営）

発行 令和7年9月

編集・発行 公益財団法人 日本農林漁業振興会

〒104-0045

東京都中央区築地3-12-5 築地小山ビル4階

TEL (03)-6441-0791 (代)

FAX (03)-6441-0792

URL <http://www.affskk.jp>

本資料に掲載の記事、写真の無断転載を禁じます。